

昭和54年度

熊谷市埋蔵文化財調査報告

万 吉 西 浦 遺 跡

1 9 8 0

熊 谷 市 教 育 委 員 会

序文

熊谷市万吉は、荒川に南接し、広大な面積で農業が営まれている地区です。当地でも農業近代化の傾向に沿って、圃場整備事業が施行されていますが、桑畠となっている微高地上に土器片が発見され、昭和53年8月に試掘を行った結果、縄文時代、および、古墳時代の遺跡であることが確認されました。

熊谷市教育委員会では、桑の抜根整地作業および、溝の掘削工事によって破壊される遺跡部分について、国・県の補助を得て、（昭和53年～54年度の継続事業として）発掘調査を実施しました。地元住民の協力と、冬としては暖かい気候に恵まれ順調に進行し、多数の縄文、古墳時代等の遺構、遺物を検出しました。

本書はその内容をまとめたのですが、新しい事実も発見され、参考に資するものと信じております。

最後になりましたが、常に現地において指導、協力して下さった市文化財保護審議委員、夏目米蔵先生、県文化財保護課、深谷土地改良事務所、江南土地改良事務所の方々、工事請負の江田組、笠原建設、立正大学学生の方々に対し、深く感謝の意を表します。

昭和55年3月

熊谷市教育委員会

教育長 森 田 芳 一

例　　言

1. 本書は、熊谷市大字万吉字西浦に所在する万吉西浦遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、河南圃場整備事業に伴う事前記録保存の為の発掘調査である。
3. 本調査は、昭和53・54年度の継続事業であり、本年度はその2年度である。
4. 発掘調査は、第1次は、昭和54年2月1日～3月10日、第2次は、昭和55年2月12日～2月23日まで実施した。
5. 遺構名は、その遺構の所在するグリッド名を用いた。
6. 調査組織は次のとおりである。

発掘主体者	熊谷市教育委員会教育長	森田 芳一
調査員	熊谷市教育委員会社会教育課主事	寺社下 博
調査補助員	駒沢大学学生	佐々木浩一
	法政大学学生	江森 光芳
	法政大学学生	並木 克文
	立正大学学生	福島日出海
事務局	熊谷市教育委員会社会教育課長	山下 光男
	熊谷市教育委員会社会教育課長補佐	関根 貞次
	熊谷市教育委員会社会教育課係長	養田 元二
	熊谷市教育委員会社会教育課主事	蓮沼 葉子
調査指導	熊谷市文化財保護審議委員	夏目 米蔵

7. 本書の編集は、寺社下が行なった。
8. 発掘調査に際し、立正大学学生、三宅、渡辺、西井、駒沢大学学生、伊東氏らの協力があった。

目 次

序文 熊谷市教育委員会教育長 森田 芳一

例言

目次

挿図目次

図版目次

I	遺跡の概要	1
II	遺構および遺物	3
1.	縄文時代	3
	A - 3 埋甕	3
	C - 5 土掘	4
	D - 4 集石遺構（炉）	7
	E - 4 集石土塙	7
	E - 6 集石土塙	8
	F - 10 土塙	9
	I - 9 土塙	9
	I号溝	11
	II号溝	12
	III号溝	13
2.	古墳時代	20
	K - 3 住居址	14
	2 A - 5 溝状遺構	15
3.	近世	16
	D - 5 土塙	16
	IV号溝	17
	V号溝・VI号溝	19
	VII号溝	19
	E - 7 集石遺構	19
III	遺跡土層	20

挿 図 目 次

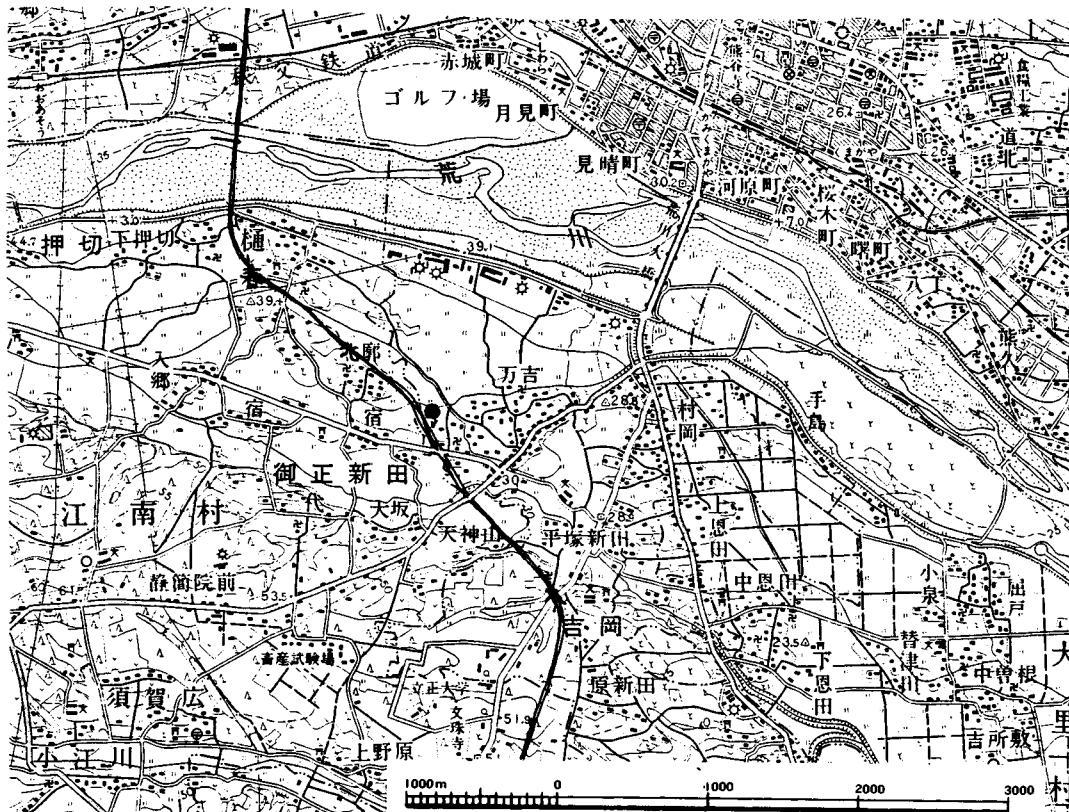
- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1. 地形図 | 7. C - 5 土塙 |
| 2. 1次発掘区——検出遺構位置図 | 8. E - 4 集石土塙 |
| 3. 2次発掘区——検出遺構位置図 | 9. E - 6 集石土塙 |
| 4. A - 3 埋甕実測図 | 10. E - 6 集石土塙、礫除去後 |
| 5. 遺構出土土器拓影図及実測図 | 11. E - 6 集石土塙、骨片出土状況 |
| 6. 2A - 7 区出土土器拓影図 | 12. E - 6 集石土塙、礫第2面 |
| 7. C - 5 土塙実測図 | 13. F - 10 土塙 |
| 8. D - 4 集石遺構(炉)実測図 | 14. I - 9 土塙 |
| 9. E - 4 集石土塙実測図 | 15. I号溝 |
| 10. E - 6 集石土塙実測図 | 16. I号溝拡大 |
| 11. F - 10 土塙実測図 | 17. II号溝 |
| 12. I - 9 土塙実測図 | 18. III号溝 |
| 13. 出土石器実測図 | 19. IV号溝 |
| 14. I号溝 | 20. 出土繩文式土器 |
| 15. II号溝 | 21. 出土石器 |
| 16. III号溝 | 22. K - 3 住居址 |
| 17. K - 3 住居址実測図 | 23. K - 3 住居址カマド |
| 18. 2A - 5 溝状遺構 | 24. K - 3 住居址鉄器出土状況(1) |
| 19. D - 5 土塙・IV号溝・V号溝 | 25. K - 3 住居址鉄器出土状況(2) |
| 20. D - 5 土塙・IV号溝・V号溝出土土器 | 26. 2A - 5 溝状遺構 |
| 21. VI号溝 | 27. 2A - 5 溝状遺構 |
| 22. E - 7 集石遺構 | 28. IV・V号溝及びD - 5 土塙 |
| 23. 遺跡土層図 | 29. IV・V号溝交点附近 |
| | 30. IV・V号溝交点遺物出土状況 |
| | 31. D - 5 土塙遺物出土状況 |
| | 32. VI号溝 |
| | 33. E - 7 集石遺構 |
| | 34. 2B - 1 集石 |
| | 35. 近世遺構出土遺物 |

図 版 目 次

- | |
|-----------------------------|
| 1. 航空写真 |
| 2. 1次発掘調査区 |
| 3. 2次発掘調査区 |
| 4. A - 3 埋甕及び2A - 7 出土繩文式土器 |
| 5. D - 4 集石遺構(炉) |
| 6. D - 4 集石遺構、集石除去後 |

I 遺跡の概要

万吉西浦遺跡は、熊谷市大字万吉字西浦に所在し、荒川の南方1kmの洪積扇状地上に位置する。南500mには、比高10mの比企丘陵の先端がせまる。遺跡と台地の中間には、また荒川の古流路がある。このため、遺跡の基本土層は、耕作土—砂質黒褐色土—砂質黄白色土（ロームが混在する場合がある）一疊層となっている。



第1図 地形図

第1次調査は桑の抜根整地作業によって、破壊される部分を対象にして、40×48mの範囲で行なった。発掘方法は、発掘前の表採で土師器・須恵器、8月の試掘で繩文式土器を採集したので、両期の遺構を想定し、4mグリッドを設定し、トレンチを併用した。北東隅をA-1とし、西へB・C・D……L、南へ2・3・4……11と呼称した。発掘調査は、Aライン、Cライン、Fライン、Iライン、Kラインの南北ラインに1×3mのトレンチを入れ全体の土層状況、遺構の分布状態を知ろうとした。その結果遺構基盤土層は、砂質ローム・疊混在層（Fig.2, 2点鎖線以西）、ローム・砂質黄白色土・混在層（Fig.2, 1点鎖線と2点鎖線の中間）、砂質黄色土層（Fig.2, 1点鎖線以北）の3層が認められ、遺構は、6ラインより南に集中することが知れた。次に、1ライン、

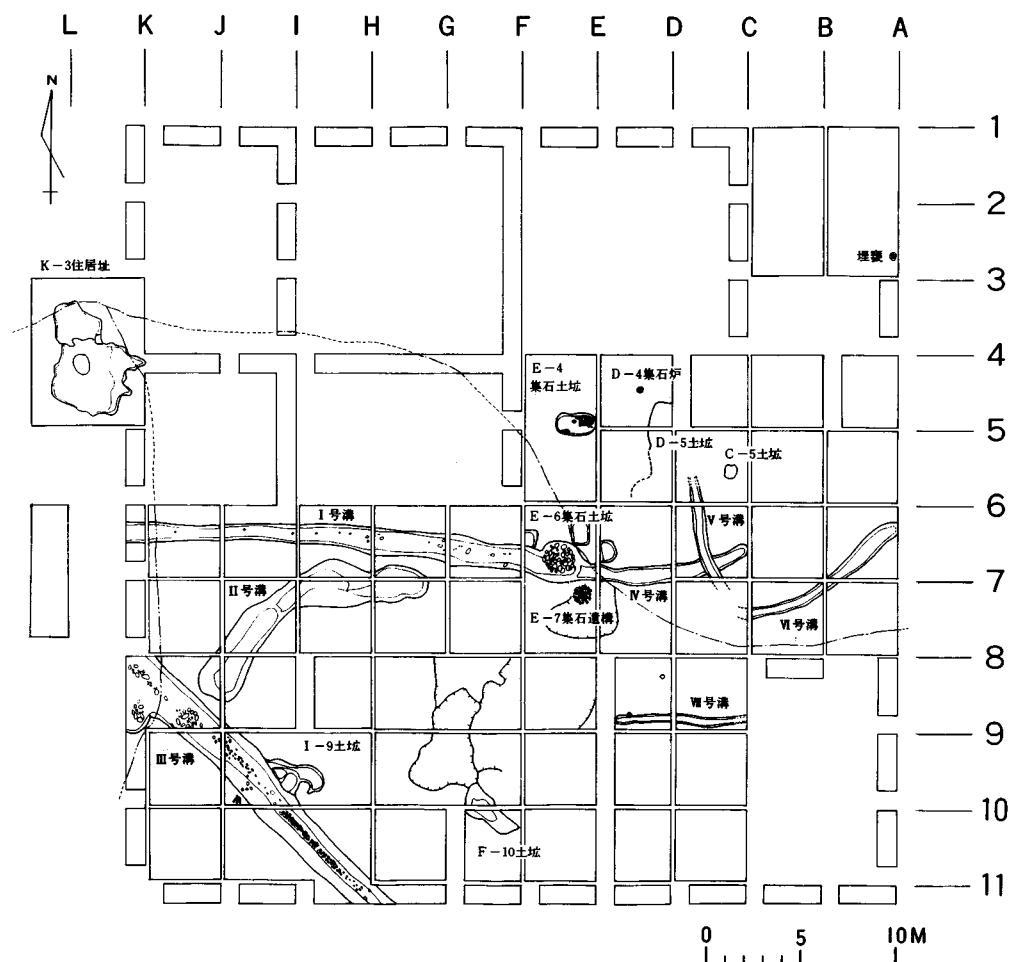
4ライン、6ライン、8ライン、11ラインの東西ラインに $3 \times 1\text{ m}$ のトレンチを入れ、範囲を限定した。その後、順次各グリッドを拡張し、遺構の精査を行なった。

遺構は、縄文時代、古墳時代、江戸～明治時代初期に及ぶ。A-1からK-11に向けて、つまり、北東部から南西部に縄文時代の遺構が、東部に近世・近代の遺構が、西北部に古墳時代の遺構がそれぞれ分布している。縄文時代は、埋甕1、集石炉1、集石土壙墓2、小ピット1、土壙2、溝3を検出した。その他恐らく縄文時代であろうと思われる浅い落ち込みが隨所にみられる。

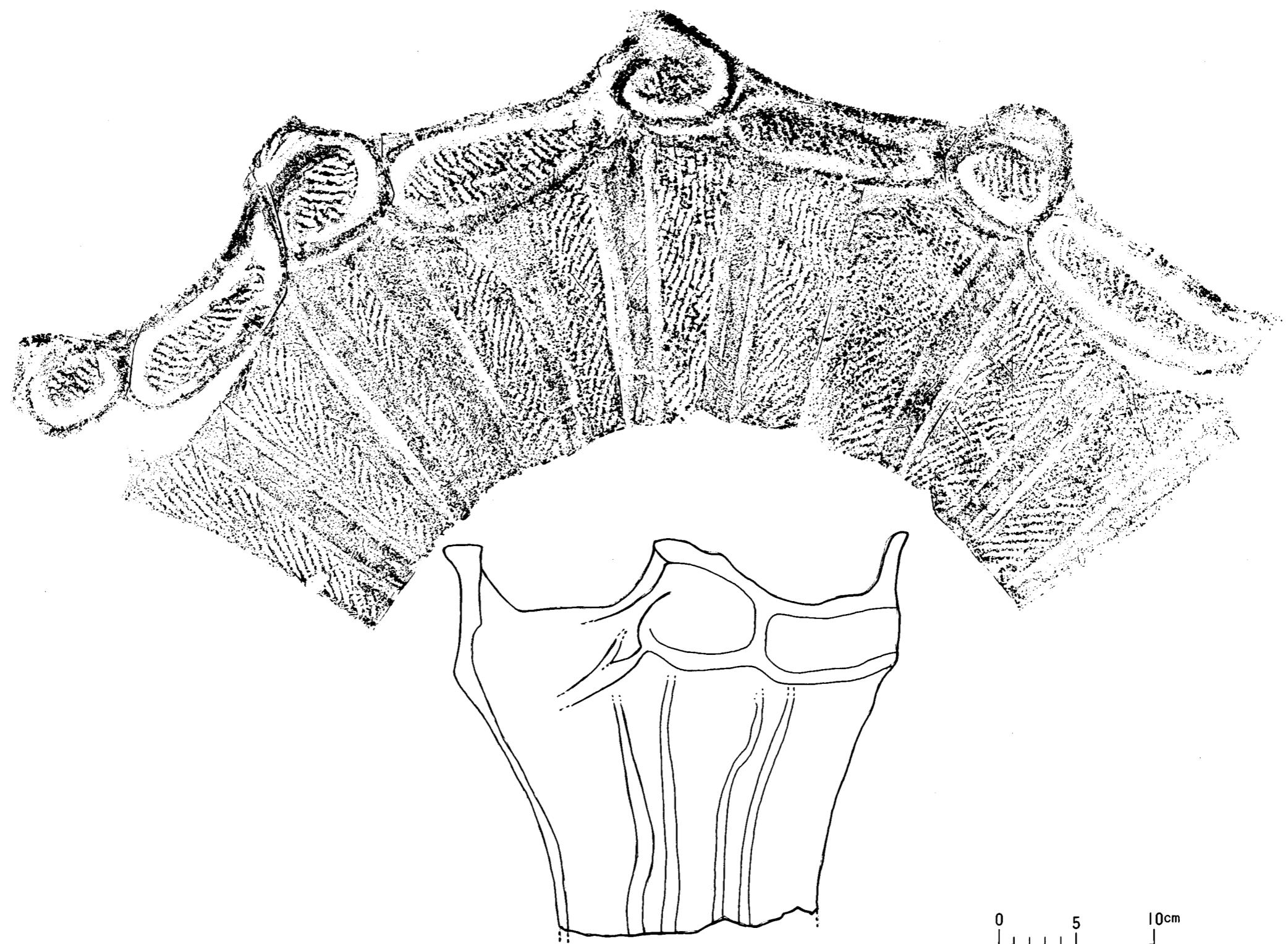
古墳時代は、竪穴住居址1、竪穴1を検出した。

江戸～明治時代初期に比定される遺構は、溝4、土壙1を検出した。また、縄文時代のE-6集石土壙墓を構成していた礫を取り除いて集石した痕跡（E-7集石遺構）もこの時代に比定される。この時代の遺構は、この地域に限定されている。

時期決定については、遺構がほとんど単独で検出されていることと、上層が耕作によって破壊を受けていることにより、相互の前後関係は、ほとんど不明である。



第2図 1次発掘区——検出遺構位置図



第 4 図 A-3 埋甕実測図

第2次調査は、堀の掘削工事によって、破壊される部分を対象にした。堀の位置が熊谷・東松山有料道路に沿っているためN-8°-Wに軸をとって、90×6mの範囲で行なった。第1次調査区の西方約110mの位置にあたる。

6m幅の中央に2m幅のトレンチを設定し、これを基本とした。さらにトレンチを2mグリッドに区分し、10m間隔に配置した。グリッド名は、1次との混同をさけるためアルファベットの前に2を用いることとし、中間にある民家に通じる道路の北を2A区、南を2B区とした。2A区は1~10まで、2B区は1、2までがある。

第1次調査区と比較すると、全体的に遺構基盤層が高く、2A-8、2A-9、2A-10区では最上面まで礫層であり、遺物含有層は全くない。この基盤層は南へ行くに従って低くなり、2A-10区と2B-1区での比高差は約1mある。

確認された遺構は、2A-5区を中心とした平安時代溝址1と、2B-1区で発見された時代不明の礫群のみである。

II 遺構および遺物

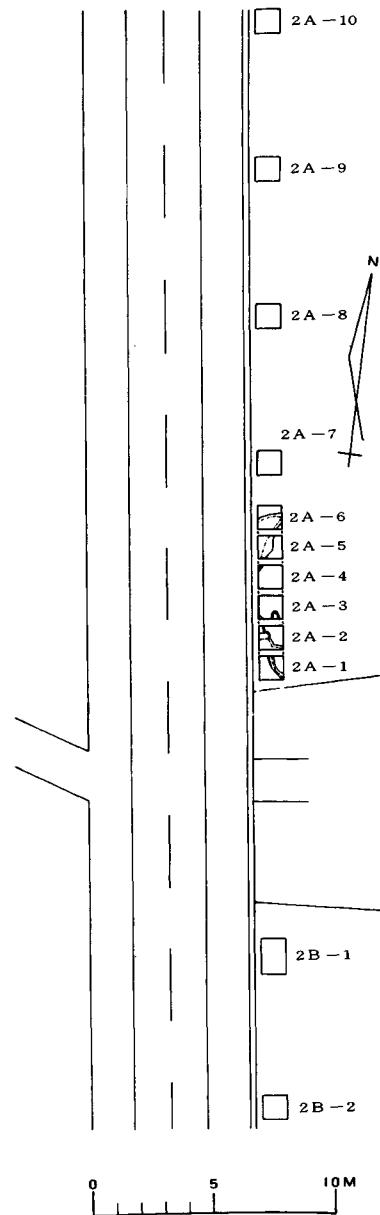
1. 繩文時代

A-3埋甕

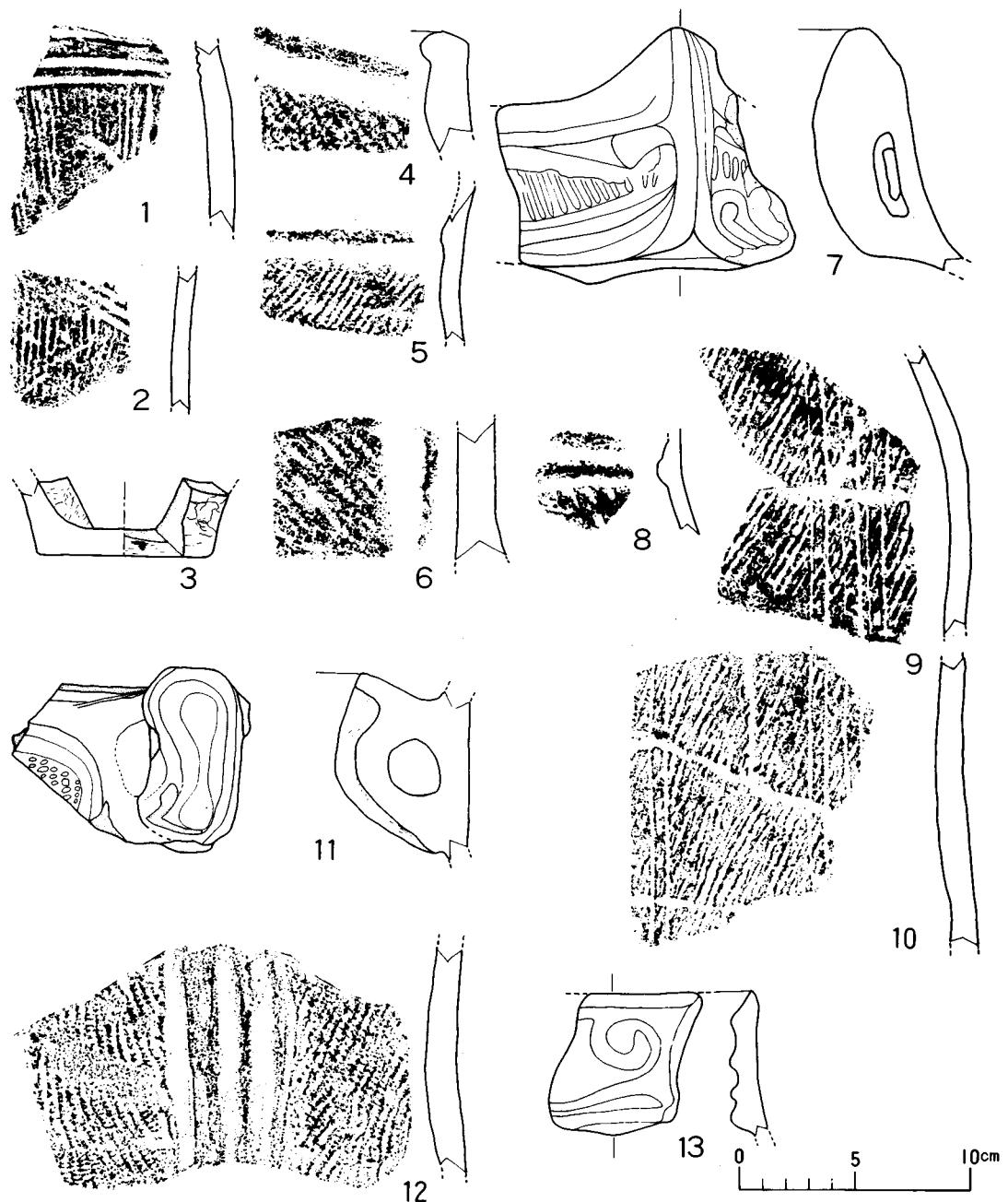
A-3区より出土。土器は底部を欠き、倒立している。土器の存在が発見された層は、耕作土の最下部であった。底部の欠損は、耕作によるものであろうか。当初、出土レベルの高さと、土器を包含している土層に差異が認められない点から、包含層中の土器と考えていた。しかし、この土層が当地区の遺構基盤層であることが確認され、出土状態から埋甕とした。なお関連遺構は確認されていない。

○出土土器

底部を欠くが、キャリパー状を呈する深鉢型土器である。胎土は粗く、少々礫を多量に含み表面は剥離がはげしい。口縁は、長円形に隆起で囲まれた中に周辺を磨消した単節斜繩文が施されている。胴部は、同じく単節斜繩文であるが、繩文の施文方向が、口縁と逆になっている。その後、縦に磨消し、両者の接点を太い沈線で区画している。口縁突起および内面は、丁寧に撫でが施されている。加曾利E II式の古い段階であろうと思われる。



第3図 2次発掘区一検出遺構位置図



第5図 遺構出土土器拓影図及実測図

C-5 土塚

長径115cm、短径85cm、最深部25cmを計り、不整長円形を呈する。底面は、西側で急に落ち、東に向けて緩やかに移行する。覆土には、同一器体であろうと思われる土器片が散在しているが、磨耗が激しく定かでない。覆土には何の特色も認められなかった。

出 土 遺 物

1. C-5 土塙出土

2本単位の横行する、幅5mmの沈線によって区画された下位に、縦の条線が施されている。深鉢形土器の破片である。胎土は細かいが、2mm大の砂粒を含む。表面淡黄色を示すが、ススの付着した部分もある。

2. C-5 土塙出土

3本単位、幅5mmの山形沈線の下位に縦の条線が施されている。胎土は粗い。

3. C-5 土塙出土

深鉢形土器の底部である。円板状の底面を胴部に貼り付けたものである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。

4. 5. D-4 集石遺構出土

深鉢形土器の口縁部である。磨消繩文をもち、口辺部は丸味をもって脹らむ。胎土は粗い。表面淡黄色を示すが、ススの付着した部分もある。5はその下位に当る。隆帯によって区画し、磨消繩文は、口縁部のそれより細かい。

6. E-6 集石土塙出土

深鉢形土器の口縁部。方形の磨消繩文を隆帯で区画している。胎土は粗く、灰色がかかった淡黄色を示す。

7. H-6 区出土

深鉢形土器の口縁部である。隆帯区画の内部に、周辺を磨消した条線文をもつ。縦方向の隆帯は、把手を造り出している。胎土は粗く、茶褐色を示す。

8. H-6 区出土

鉢形土器の一部。簿手であり、横走する隆帯の下位に斜条線が施されている。黒味を滲びた茶褐色を示し、胎土は粗い。

9. 10. H-6 区出土

深鉢形土器の胴部である。RLの繩文を施し、縦に6本単位の条線をもつ。茶褐色を示し、胎土は粗い。

11. H-7 区出土

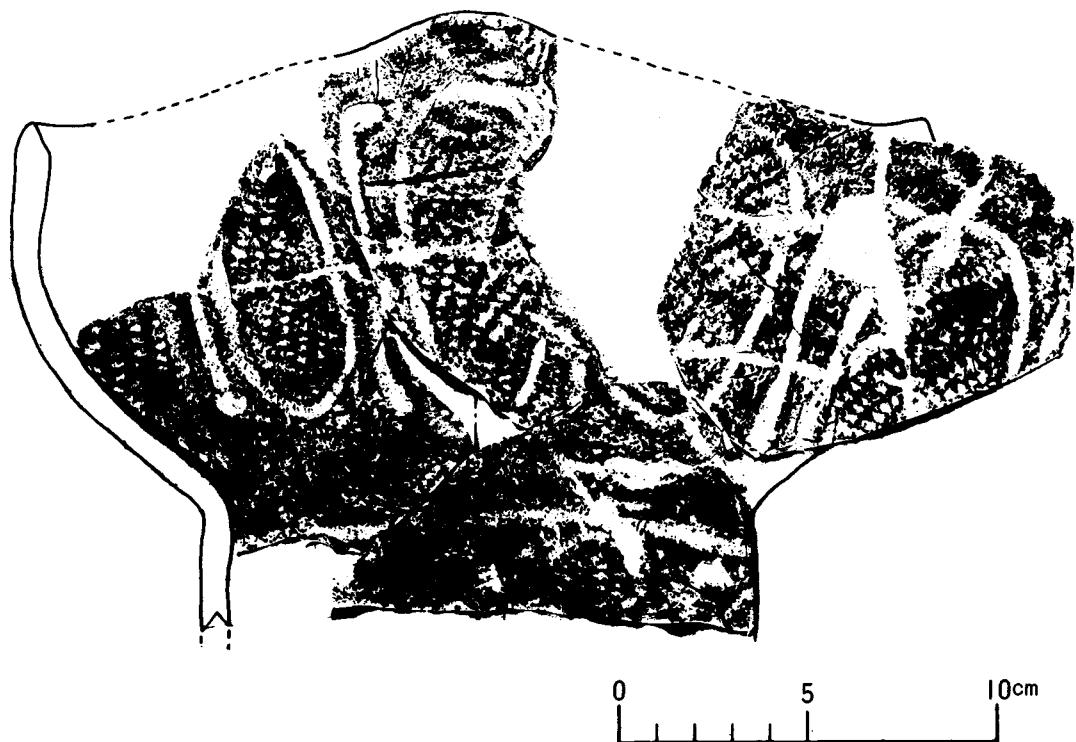
深鉢形土器の口縁部である。長円な隆帯区画内に磨消繩文をもつ。縦の隆帯は、横幅の広い把手を造り出している。胎土は粗く、黄褐色を示す。

12. I-7 区出土

RLの繩文を施した後、縦に3本の幅広い沈線を施している。胎土は粗く、茶褐色を示す。

13. F-9 土塙出土

隆帯のみのモチーフである。鉢形土器の口縁部である。黒褐色を呈し、胎土は粗い。

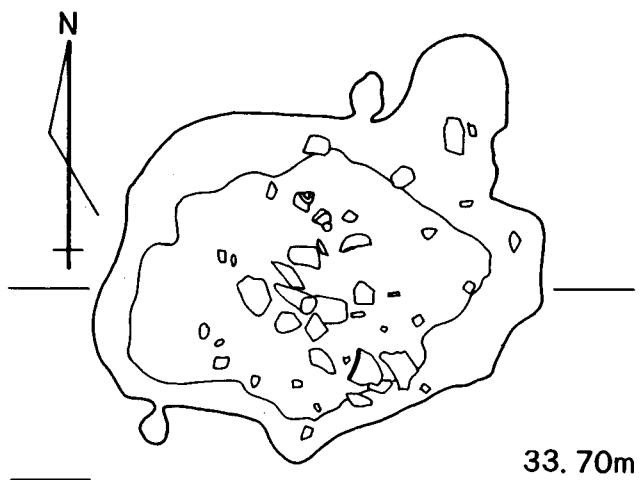


第 6 図 2 A - 7 区出土土器拓影図

2 A - 7 区出土土器

キャリパー状を呈する深鉢形土器である。縦に長い楕円形の磨消繩文の周囲を沈線で区画し、中間に G 状の沈線を施している。胴部に移行する部分に横行の沈線が施されていて、下位の文様帶と区画しているが、下位の文様帶は不明確である。胎土はやや粗く、淡黄色を呈する。

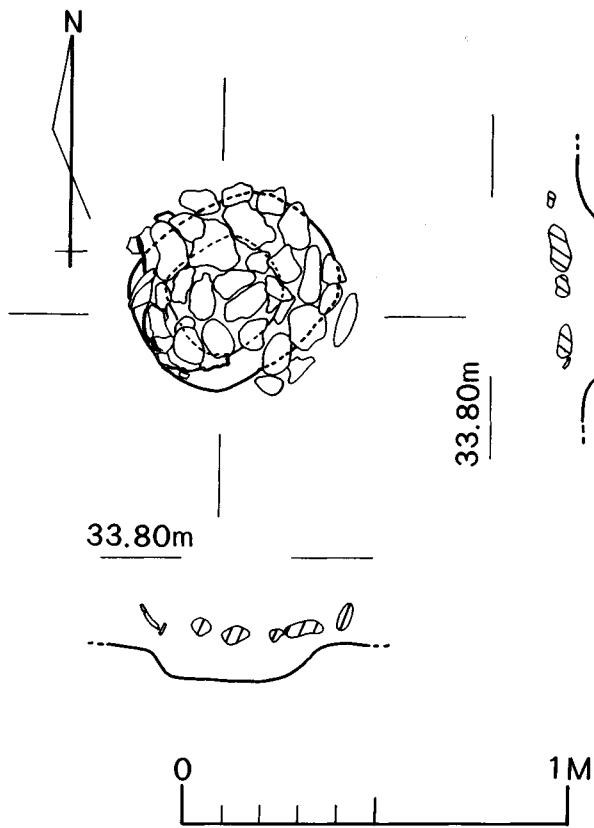
第 7 図



C - 5 土塙

実測図





第8図 D-4集石遺構(炉)実測図

D-4集石炉

長径53cm、短径43cm、深さ7cmを計り、北東一南西方向に長軸をもつ長円計を呈する。実際の深さは、12~20cmを計ると推定される。西側には、甕破片が45度の角度で周る。礫は上面にならべられており、周辺のものは扁平になっている。礫の下部に層は成さないが焼土が認められる。また、西側に周る甕破片の内側に若干、火を受けた痕跡がみられることから本遺構は、炉址と考えられる。

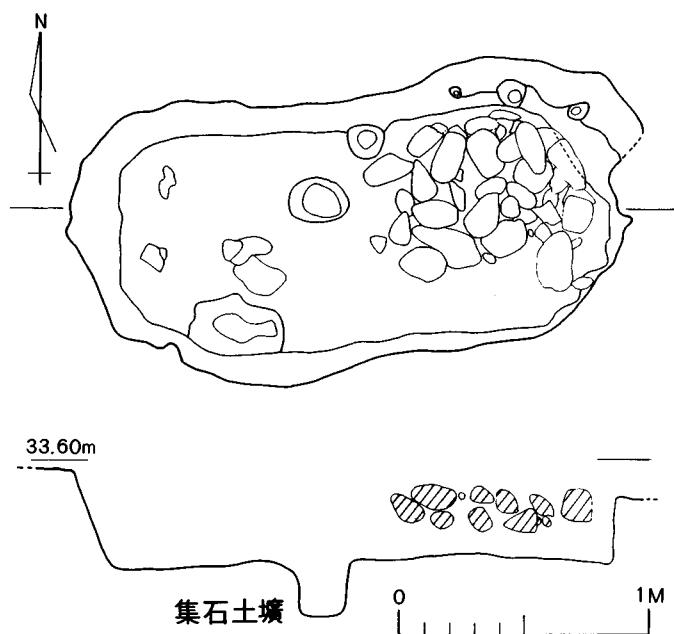
E-4集石土塙

長径2m20cm、下部径1m90cm、短径1m10、下部径85cm、深さ25~40cmを計る。主軸はほぼN-90°-Eを示し、隅丸長方形を呈する。底面はほぼ水平であり、ピットが3ヶ所にある。壁際の2ピットは浅いが、中央部ピットは深さ22cmを計る。底面より10cm前後浮いた状態で、土

第9図

E-4集石土塙

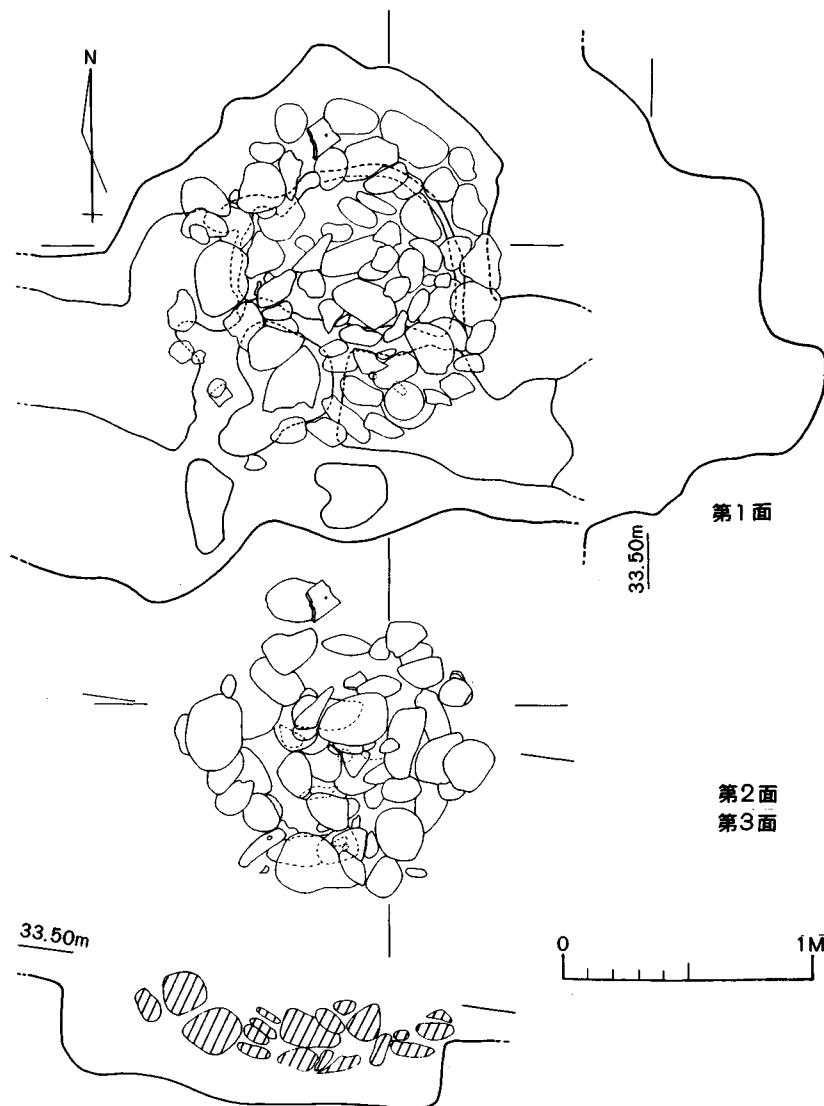
実測図



廣東半分に礫が散在する。覆土中より縄文土器破片が出土している。

E-6 集石土塙

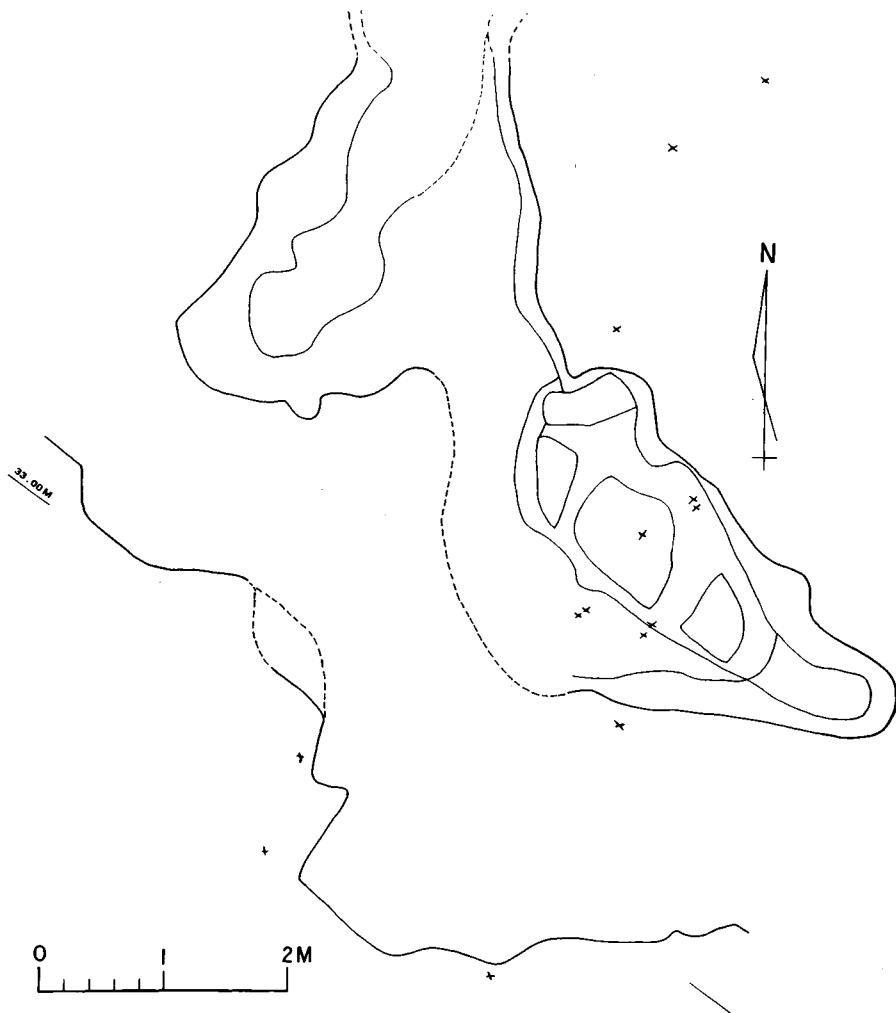
半径1m50cmの不整円形ピットの周囲および上面に、5~30cm大の礫を円形にならべている。礫はおよそ3段に分かれ。周辺部の礫は整然と配置されているが、中央部は雑然としている。底面は段状になっている。深部は75cm、浅部は35cmを計る。浅部に礫第1面が置かれている状態で、第2・3面は深部上にくる。深底面と、礫の間隔は、15cm前後あり、縄文式土器破片および、骨片が出土している。西側に連続する1号溝よりも新しいと考えられる。東側はIV号溝に一部破壊されている。礫の間に瓦が出土しているが、これは、E-7遺構との関連から、近世に流入したものと判断される。ちなみに、礫上層は、耕作土である。



第10図 E-6 集石土塙実測図

F-10土塙

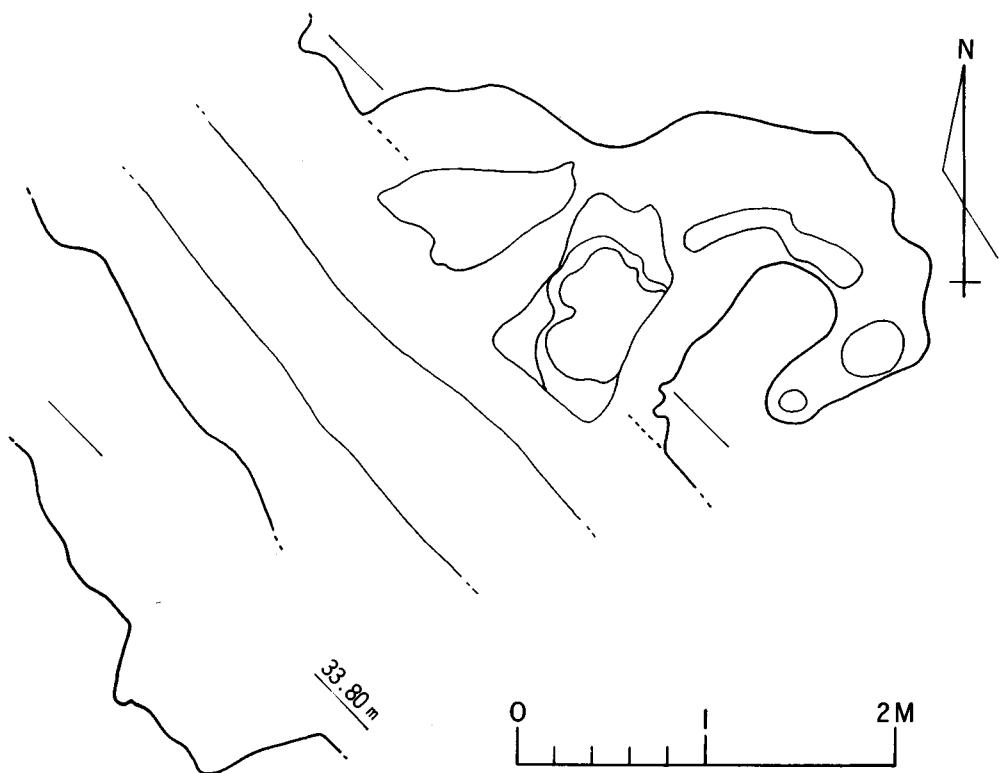
長径 3 m 40cm、短径 1 m 40cm、深さ 1 m 20cmを計り不整長円形を呈す。主軸方位は、N-45°-Wを示す。断面は、西側で急に落ち込み、底面丸味をもって一度急に立ち上り、中段で緩斜面に移行する。出土遺物は、覆土中に土器片が一片のみである。



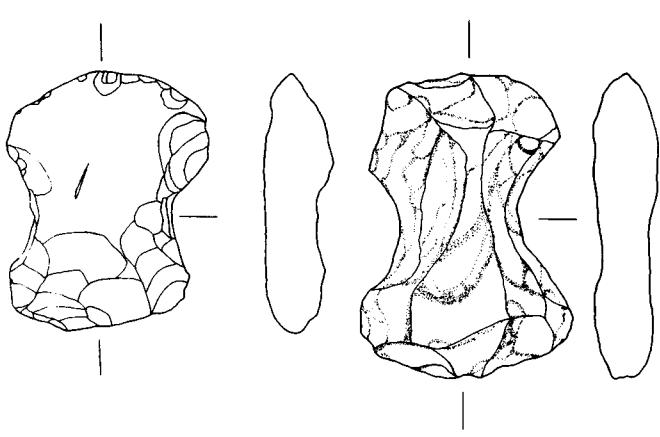
第11図 F-10土塙実測図

I-9土塙

III号溝と重複しているが前後関係は不明である。本質的には方形を呈していると思われるが、東部に浅い落ち込みが連続して、不整形を呈している。北西から南東に主軸をもつと考えられる。南西部が深く、段をもち、ゆるやかに立ち上る。最深部の深さは、50cmを計る。



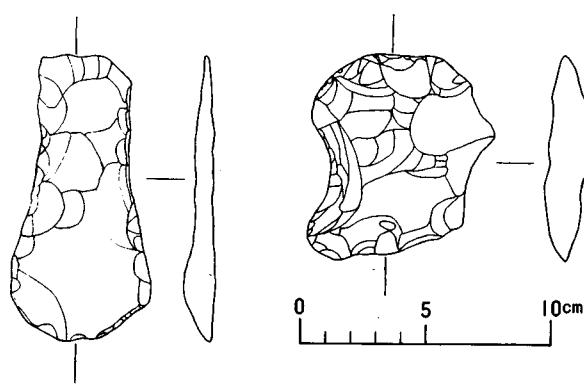
第 12 図



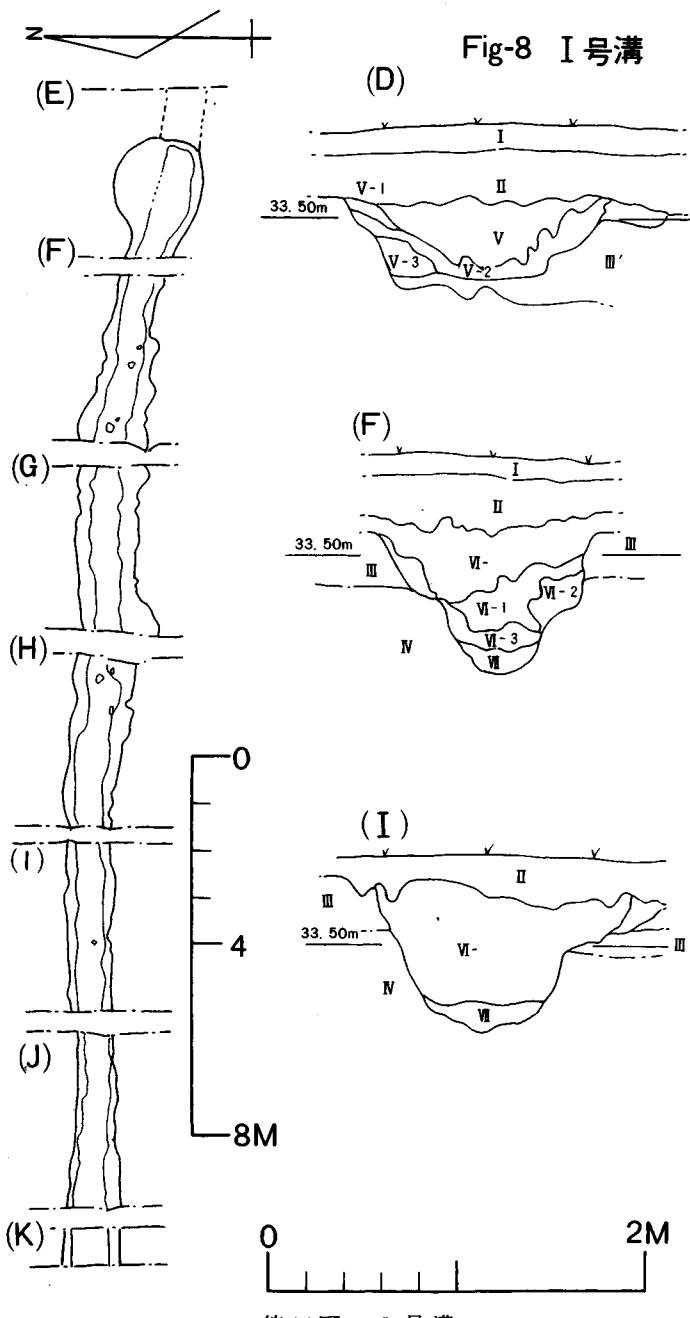
I - 9 土塙実測図

—

第 13 図



出土石器実測図



第14図 I号溝

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| I. 耕作土。 | IV'. 黒色土がブロック状に混入する砂質黄白色土。 |
| II. 茶褐色土、しまりがあり黒色砂粒を含む。 | V. 黒色土、砂粒を含む。 |
| III. 砂質黄白色土。 | V-1. 灰色の砂粒を含む。 |
| IV. ロームを含む砂質黄白色土。
(以上4層が基本土層となる) | V-2. V層に比してブロックが小さくなり褐色味を増す。 |

I号溝

E-6集石土壤から、6ラインを、F、G、H、I、J、Kと連続している。西端を確認すべく、L-6区にトレンチを入れたが、連続しておらず、K-6区で終結するものと思われる。溝幅は75cm～1m65cm（上端の崩れた部分と思われる）、深さ50～80cmを計る。断面台形を呈し、ところによって段をもつところもある。遺物は、縄文式土器破片・礫が、覆土中に点在している。I号溝は本来、E-6土塙下まで存在し、土塙の中央部で立ち上っていたと考えられる。それは、I号溝の底面上10cmにE-6土塙の底面が存在することによる。つまり、E-6土塙は、I号溝の東端を切って、位置しているといえる。溝は、西側で高く、東に向けて低くなっていく様相を呈している。

V-3. 黒色土ブロックが小さくなり、量が増す。

VI. 暗褐色土。

VI-1. 黄白色土粒が混入する。

VI-2. 黄白色土が、ブロック状に混入。

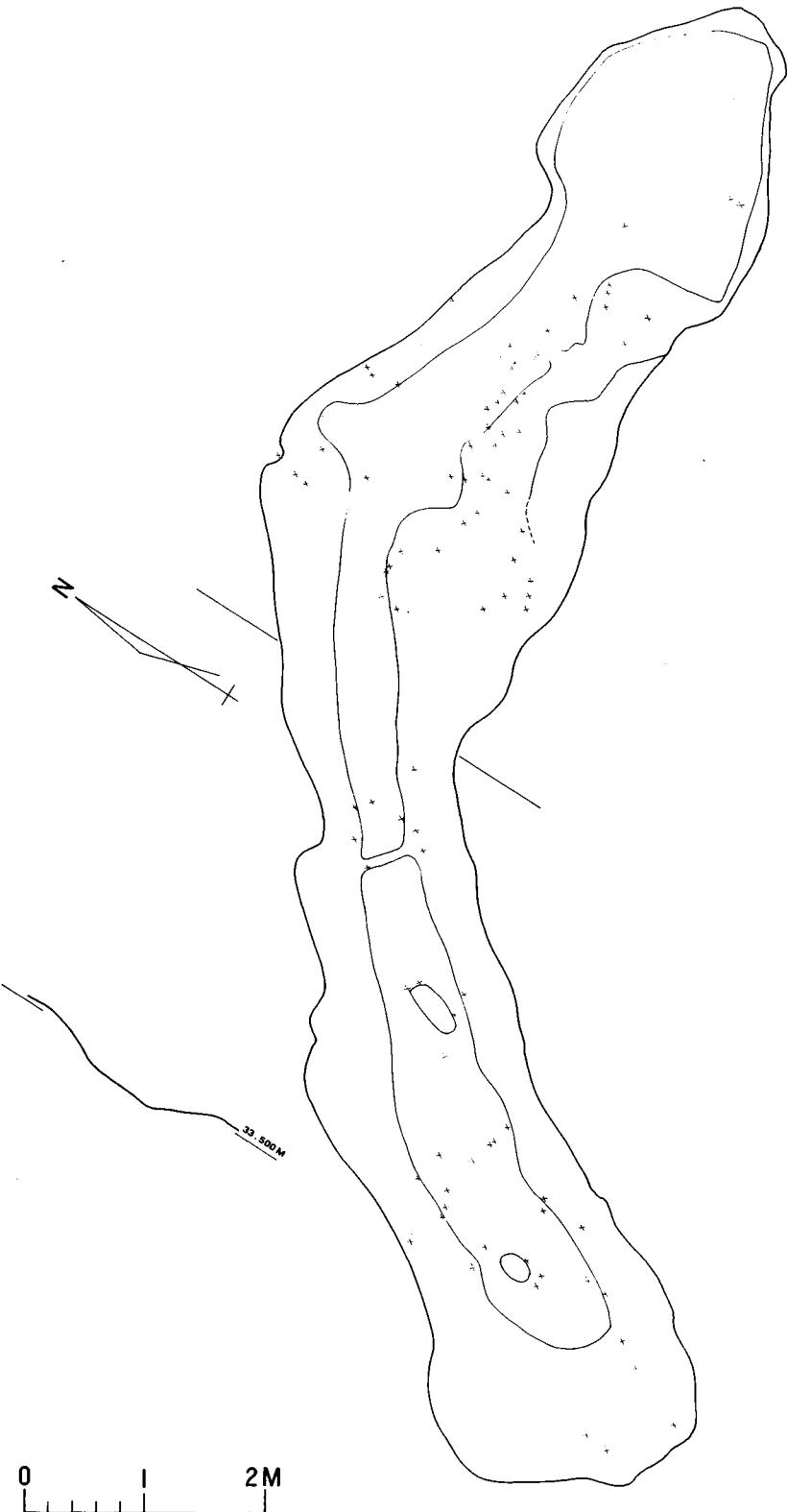
VI-3. VI-2と同様であるが、砂質が強い。

VII. 砂質黄白色土に暗褐色土を含む。

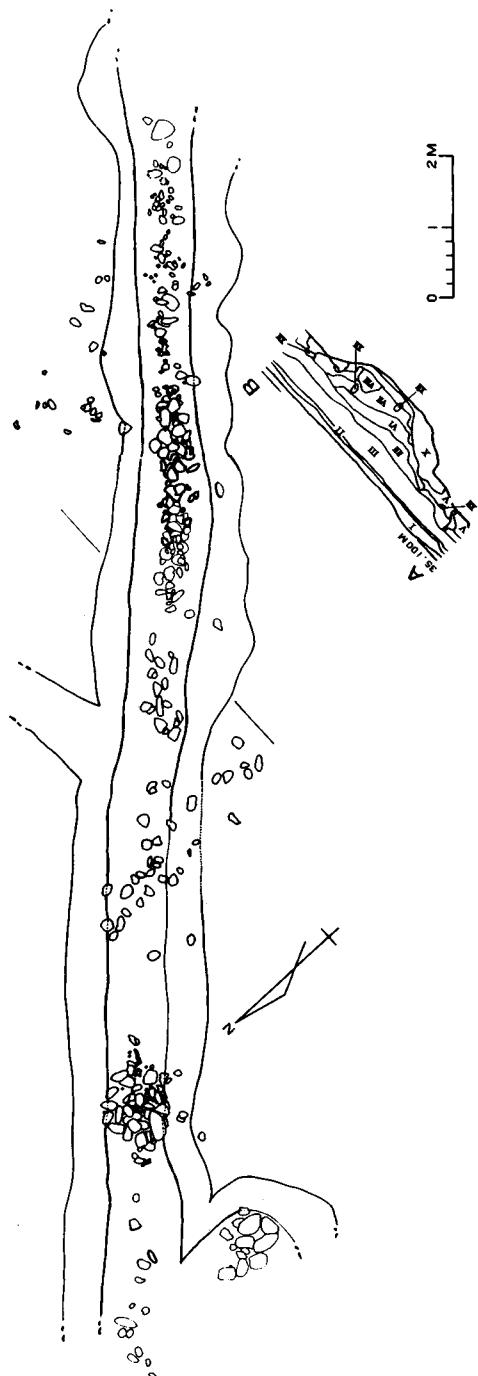
Dは、IV号溝セクションであり、基盤層は砂質黄白色土である。

II号溝

G - 6・7、H -
6・7、I - 7・8、
J - 7・8区にまた
がり孤状を呈する。
底面は摺鉢状を呈し、
最深部で、深さ25cm
を計る。中央部より、
西部と東部では若干
構築法に差がある。
西部は、両辺共同様
に立ち上るが、東部
は、北辺が急で、南
辺が緩やかである。
また、遺物の出土状
況も異なる。西部は繩
文式土器のみである
が、東部は、土師器
が覆土上に散在する。
本質的には、東西2
溝と考えた方が良い
のであるが、覆土自
体の差が認め難く、
ここでは、同一遺構
中の差異とした。



第15図 II号溝



第16図 III号溝

- I. 耕作土。
- II. 酸化鉄含有層。
- III. 茶褐色一しまりがあり非常に硬く、霜
降り状を呈している。
- IV. 暗褐色—Ⅲ層に比べて、砂質でやや軟
かい。小石が多い。
- V. 黒褐色—均質でしまりがあり砂が少な
い。
- VI. I層—I層黒褐色—土質は均質である
が、湿気、粘性に乏しく、ややぼろぼ
ろしている。
- VII. 灰黒色一下部にいくに従ってねばりが
あり、色も灰色の度合が強くなる。
- VIII. 灰褐色粘土層—砂が混入しており、粘
性 性はあまり強くはない。
酸化鉄が含まれている。青灰色がブロ
ック状に入り込んでいる。
- IX. 灰褐色—VIII層よりは砂が多い。軟なく
パサパサしている。
- X. 最も黒色の度合が強い。粒径0.5mmぐら
いの黒い砂が多い。
軟かく上部では暗褐色で下部にいくに
従って黒色が強くなる。

III号溝

G-11、H-10・11、I-8・9・10、J
-8・9、K-8区にまたがり、N-48°-W
を示し、ほぼ直線を成す。北西部は上部、底
面共幅広く、2m10cm-1m70cmを計る。東
南部へ移行するにしたがって両面共狭くなり、
1m60cm-50cmを計る。

溝覆土中に集石が2ヶ所ある。共に雑然と
集められたもので、他に遺構を伴わず、E-
6集石土塙とは性質を異にするものである。

溝底幅の広い部分では、礫が覆土中に散す
るが、狭い部位に移行すると、礫の集中がみ
られる。このような、溝の広い部分から狭い
部分への移行は、滑らかである。遺物は覆土
中に縄文式土器片がわずかに点在するのみで
ある。

IV. 暗褐色—Ⅲ層に比べて、砂質でやや軟
かい。小石が多い。

V. 黒褐色—均質でしまりがあり砂が少な
い。

VI. I層—I層黒褐色—土質は均質である
が、湿気、粘性に乏しく、ややぼろぼ
ろしている。

VII. 灰黒色一下部にいくに従ってねばりが
あり、色も灰色の度合が強くなる。

VIII. 灰褐色粘土層—砂が混入しており、粘
性 性はあまり強くはない。

酸化鉄が含まれている。青灰色がブロ
ック状に入り込んでいる。

IX. 灰褐色—VIII層よりは砂が多い。軟なく
パサパサしている。

X. 最も黒色の度合が強い。粒径0.5mmぐら
いの黒い砂が多い。

軟かく上部では暗褐色で下部にいくに
従って黒色が強くなる。

2. 古 墳 時 代

K-3 住居址

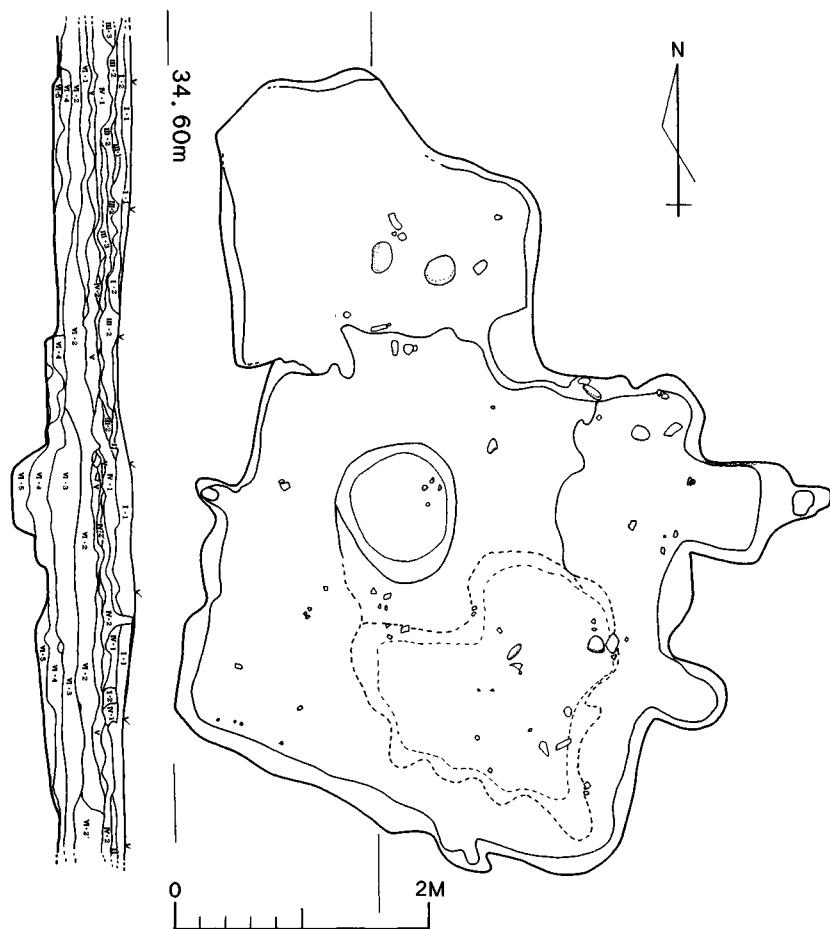
3 m 65cm × 3 m 70cmの正方形を呈し、N-100°-Eを示す。

床面はカマド側が高く、ベッド状を呈する。東南部はやわらかく、10cm下には礫層がある。柱の穴は確認できなかった。竪穴中央やや西北寄りに、深さ20cmの円形ピット（95cm×110cm）がある。性格は不明。

カマドは2基認められ、住居址東辺中央やや南に位置したものを廃棄し、同辺北端に移築している。前者は、幅50cm、奥行60cmほどに、壁を長方円に掘り込み、床を水平にし、奥壁を直立させている。後者は、2段構築で、煙道部は急に狭る。

遺物は、ほぼ全面から出土し、ほとんどが小破片である。床面からのものは少なく、大多数が覆土中より出土している。形状の明確なものは、須恵器杯のみである。また、鉄器の出土もみられ、恐らく刀子と鍔であろうと思われる。しかし須恵器、鉄器共盜難にあい、図示することができない。

住居址北側に床面レベル差+10cmの変形竪穴がある。住居址と同時期、もしくは、若干古い時期のものと考えられる。



第17図 K-3 住居址実測図

一辺約2m 20cmを
計る。床面はほぼ水
平で、礫の出土が多
くみられる。

I₁. 耕作土、非常に
硬くしまってい
て砂質で粒子は
細かい。長石を
多量に含み黄褐
色ブロックと酸
化鉄も含む。

I₂. 耕作土、硬くし
まっていて砂質
である長石と黄
褐色ブロックを
多量に含み、酸
化鉄も多少含む。

II. 全体的に黄褐色
を呈し、やや硬
く砂質で粒子が
かなり細かく、

黒褐色土の中に同量程度黄褐色土がまざる。長石を少量含む。

III₁. III₂層より粒子が粗く軟かい、酸化鉄がやや多い。

III₂III₃基調としているが、黄褐色ブロックが多少多く、酸化鉄が多少少ない。

III₂. 黒褐色、やや硬く砂質であり、粒子やや細い黄褐色ブロックと長石を多く含み一部に酸化鉄を層状に含み全体的にはあまり多くない。

III₃. 黄味を帯びた黒褐色やや硬くしまっており砂質で粒子は細かい。

IV₁. 黄味を帯びた暗褐色、やや硬く砂質であり粒子は粗い黄褐色ブロックを多量に含み、V層の砂質土のブロックと酸化鉄と細かい礫を多少含む。

IV₂. 暗褐色、やや軟かく砂質であり、粒子はやや細く黄褐色ブロックを含み、長石と炭化物を少量含む。土師器の破片がある。

IV_{2'}. IV₂層を基調として黄褐色ブロックをIV層より多量に含み、粒子がやや細かく酸化鉄は少ない。

V. 黒褐色、やや硬く砂質であり、粒子が多少粗く所々に小礫が混入。

VI₁. 暗褐色、軟かく砂質であり粒子が多少粗い。

VI₂. 茶褐色、VI₃より軟かく砂質、粒子が粗い。やや粘性あり。

VI₃. 茶褐色、VI₅より軟かく砂質であり粒子がかなり粗い。

VI₄. 黒褐色、かなり軟かく砂質でありVI₅より粘性を帯びる。

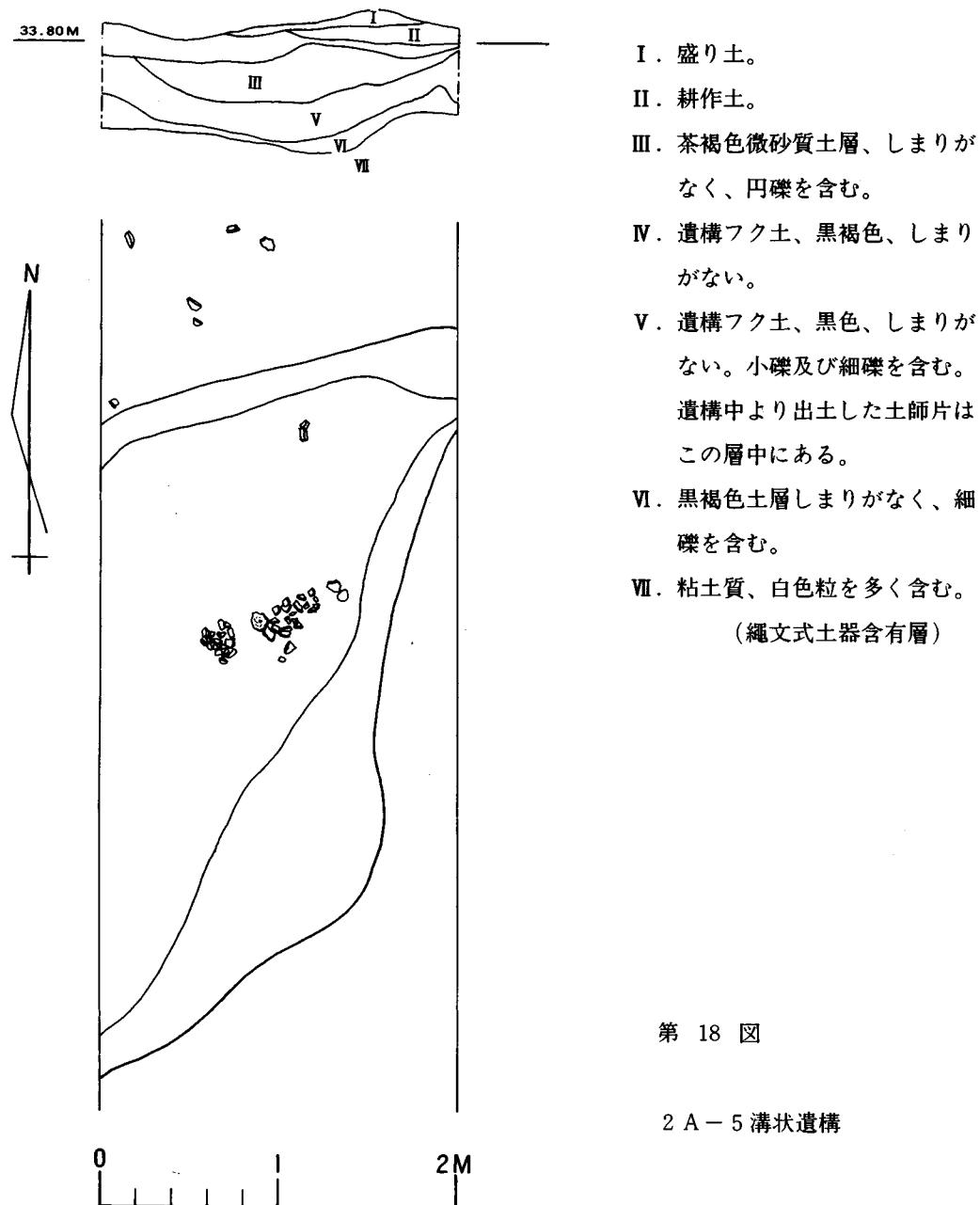
VI₅. 暗い黄褐色、軟かく砂質である。黄褐色ブロックが点在。

VI_{2'}. 暗褐色、軟かく砂質であり粒子はやや細かく多量に大粒の炭化物を含む。

VI_{2''}. 黒色、非常に軟かく砂質であり、粒子はやや粗く多量にVI_{2'}より小さ目の炭化物を含む。

2 A - 5 溝状遺構

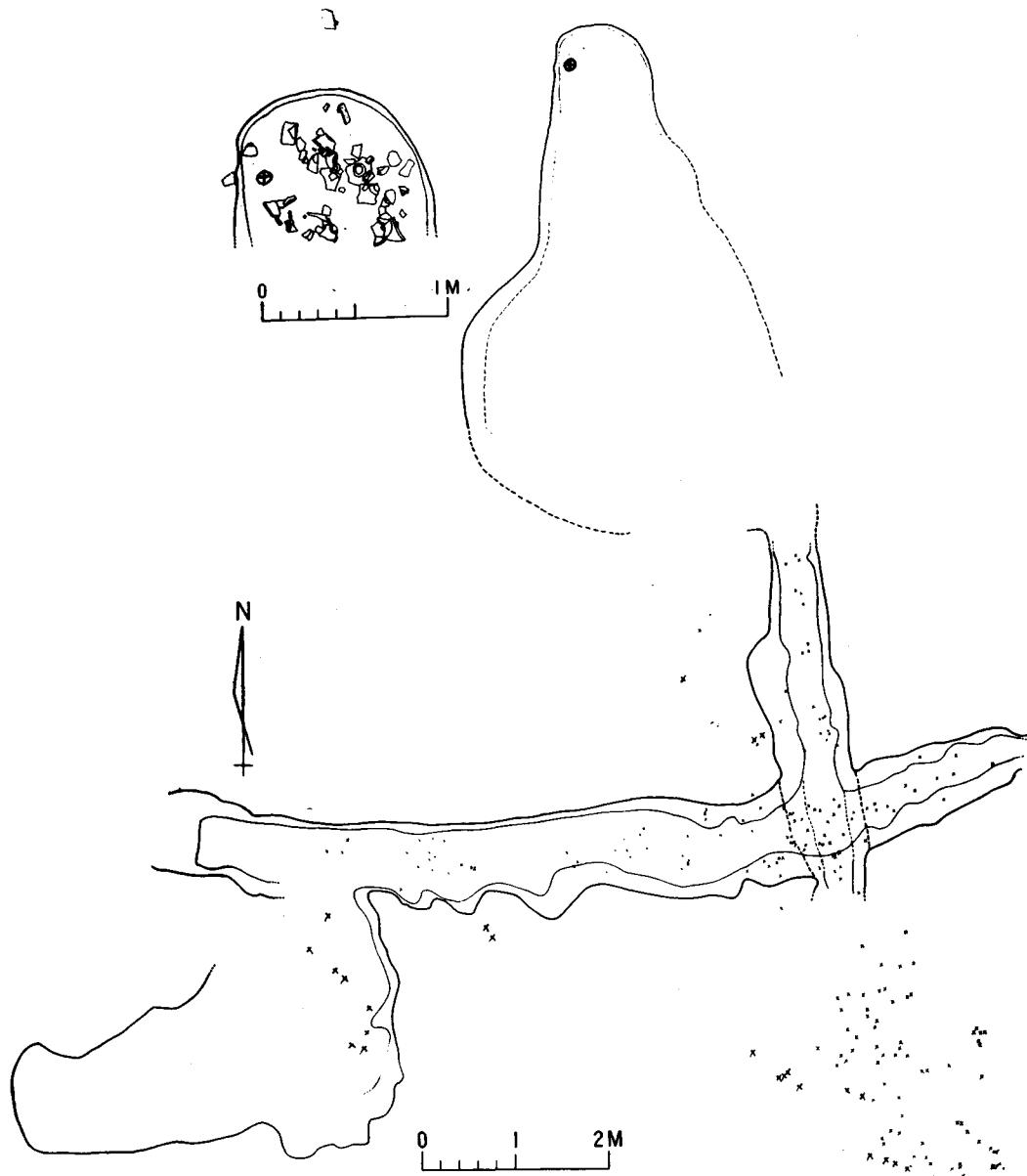
ほぼ東西に向けて存在し、東側がやや北にふれる。本グリッドで検出された部分は、溝状遺構の東端に当ると思われる。溝幅4m前後で、深さは20~40cmを測る。溝端は緩やかな傾斜をもつ。遺物は、非常に薄い土師器表の破片が出土しており、国分期に比定されよう。



3. 近世

D-5 土塙

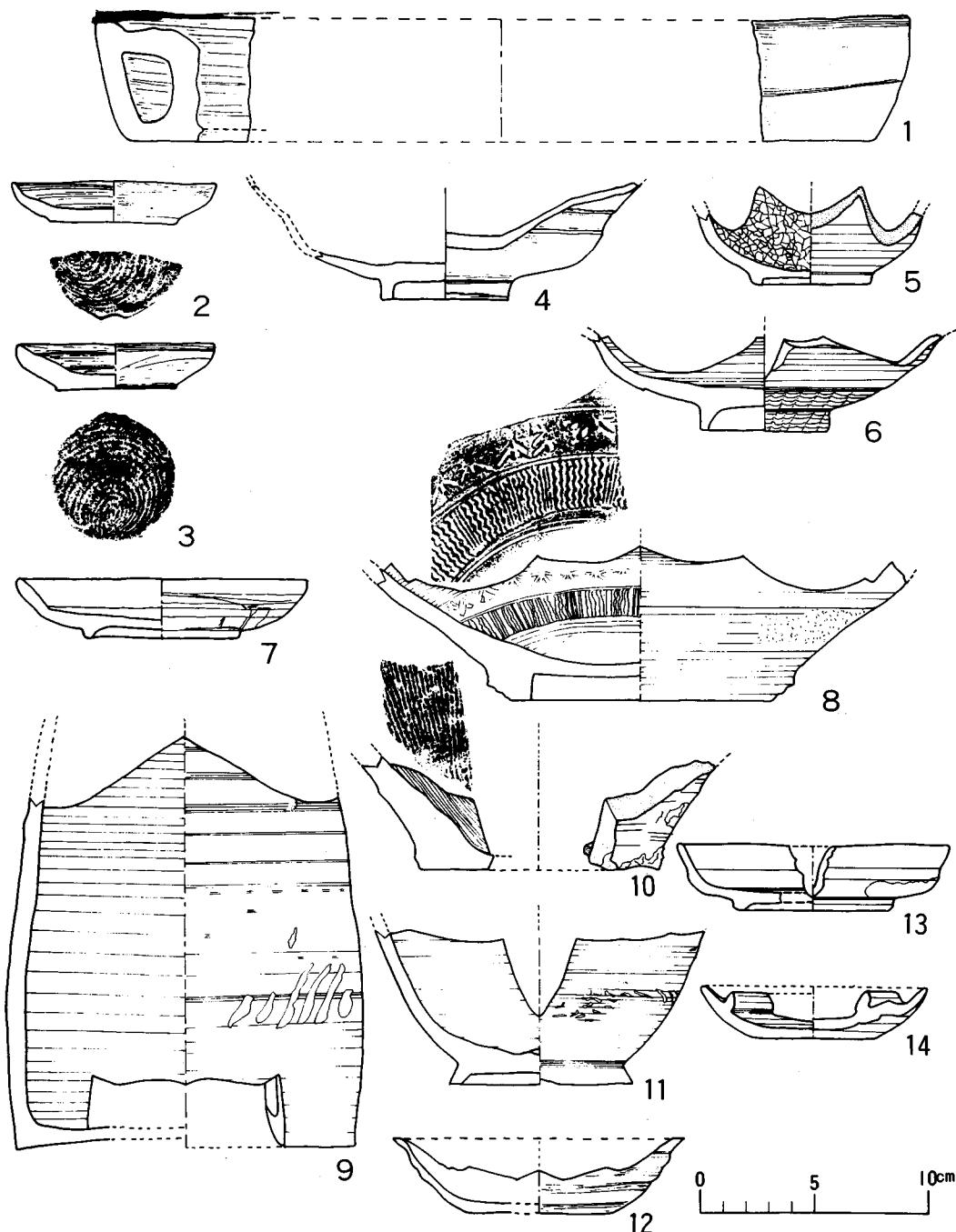
D-4、5区には、ゴミ捨て場的な土塙が在り、多数の瓦器、貝殻、礫などがほとんど破片の状況で出土している。形態は不整形であり、南北に長軸をもつようであるが、不明確である。深さは1m~1.2mほどである。本遺構と同時期に比定されるのがIV号溝である。



第19図 D-5 土塙IV号溝・V号溝

IV号溝

ほぼ東西に伸びる。西端はE 6集石土塹まで、東端はCライン東壁まで、8.9mを測る。溝幅60～85cm、深さ15～25cmを計る。覆土中に、陶磁器と交叉しており、IV号溝の方が古いことがわかる。



第20図 D-5 土塙IV号溝・V号溝出土土器

D-5 土塙出土遺物 (Fig.20-1~10)

1. 瓦器の内耳鍋である。両端の耳の部分のみ残存。推定口径36cm、器高5.4cmを計る。内耳は口縁より低い位置に付けられ、上部は、吊り下げた擦痕が残存している。
2. かわらけ。推定口径9cm、器高1.8cm、推定口径5.7cmを計る。体部が膨らみ、口縁が立ちぎみである。糸切痕が認められる。淡黄色を呈す。
3. かわらけ。推定口径8.7cm、器高1.9cm、推定底径5.4cmを計る。外面は膨らみをもって口縁に至るが、内面は底部から直線的に口縁部に至る。厚手の体部である。糸切痕が認められる。淡黄色を呈す。
4. 鉢。現高5cm、高台径5.6cm、高台高0.9cmを計る。高台以外全面に施釉されている。内面に重ね焼き痕がみられる。
5. 碗。現高4.2cm、高台径5.4cm、高台高0.4cmを計る。内面は白色釉が施され、貫入がみられる。外面は茶地に黒斑釉が全面に施されている。
6. 鉢。現高4cm、高台径5.6cm、高台高0.9cmを計る。内面は緑と焦茶の釉が中央から半分ずつ、外面は高台より上面に灰釉が施されている。高台は造り出しだある。内面に重ね焼き痕がみられる。
7. 盆。推定口径12.9cm、器高2.7cm、推定高台径6.9cm、高台高0.45cmを計る。外面底部以外全面に淡い緑釉を施している。内面に三ッ足の重ね焼き痕がみられる。
8. 鉢。現高7cm、高台径13.5cm、高台高11.5cmを計る。内面中段に木の字文様、下位に螺線と直線を混用した文様を配している。又、その下面には重ね焼き痕がみられる。地は朱色を呈しているが、表面は焦茶色を呈す。
9. 壺。現高18cm、底径15cmを計る。上げ底になっている。
10. 撃鉢。現高4.8cm、推定底径10.8cmを計る。外面に鉄釉が施されている。平底である。

グリッド出土遺物 (Fig.20-11、12)

11. H-6 区出土。碗。須恵質である。現高6.5cm、高台径8cm、高台高0.8cmを計る。
12. H-7 区出土。杯。部分的に須恵質になっている。推定口径12.8cm、器高3.3cm。推定底径6.3cmを計る。糸切り底をもつ。

IV号溝出土遺物 (Fig.20-13、14)

13. 盆。推定口径12cm、器高3.8cm、推定高台径7cm、高台高0.6cmを計る。D-5 土塙出土7と全く同様の技術であるが、体部の膨らみが若干異なる。
14. 灯明皿。推定口径9.9cm、器高2.1cm推定底径5.4cmを計る。内部に高さ0.9cm、径7.8cmの受けを付け、一端を削りとり灯芯を出すように成形している。全面に鉄釉が施されている。

V号溝・VI号溝

V号溝は、ほぼ南北に伸びる。北端はD-5土塙東側までで終結しており、南側は、C-7区で浅くなり溝状を呈さなくなる。しかしC-7区・溝の延長線上に陶磁器片が散在し、VI号溝に接合する。

VI号溝は、B-7区内で東西行し、A-6区に入って北東に向けて伸びる。Aライン東壁で終結するようである。V号溝とVI号溝によって、矩形に囲繞するような形態をとる。両溝共深さ5~10cm、幅30~60cmを計る。

VII号溝

VII号溝は、C-8、D-8区の南端に、幅30cm、深さ5cmで、8mにおよぶ。出土遺物は全くなく、時期等不明である。

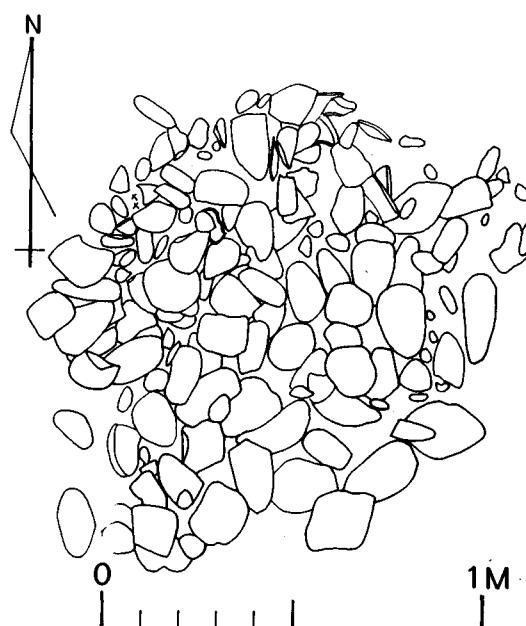
近世、近代の遺構は、一応、2期に区分され、D-5土塙・IV号溝・V号溝・VI号溝の順である。

E-7集石遺構

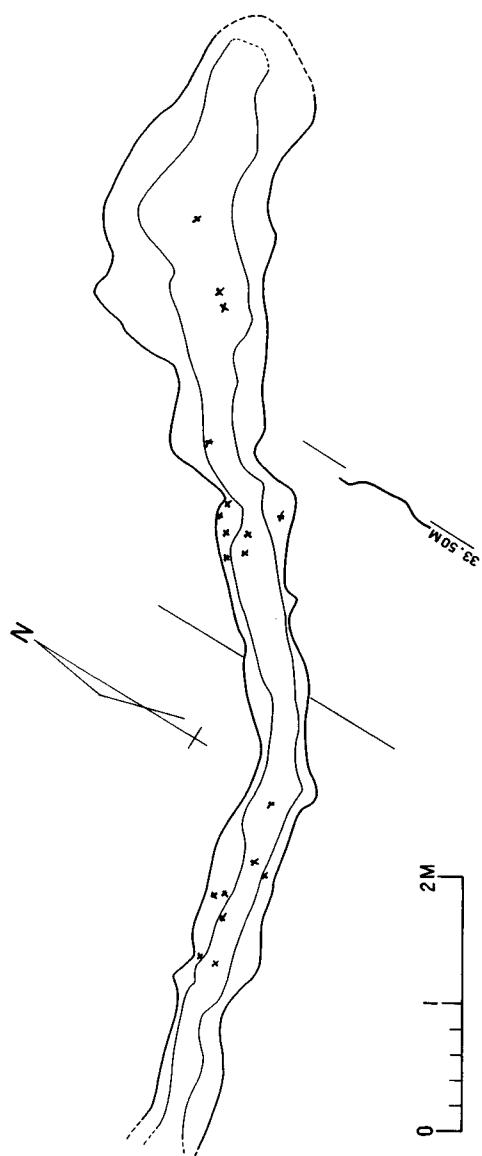
E-7集石土塙の東南1.20mに位置し、比較的小さな礫（5~10cm大）を雑然と集積している。中には、瓦も陶磁器類も混在している。

周辺には、浅い落ち込みがあり、小礫が点在する。

先に述べた様に、本遺構は、E-6集石土塙の最上面の礫を移動したものと考えられる。



第22図 E-7集石遺構

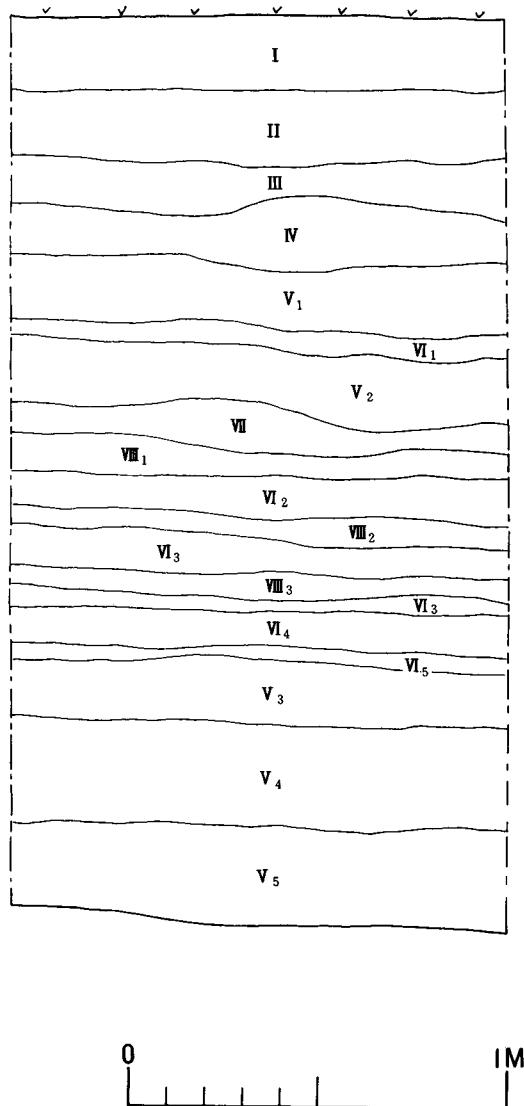


第21図 VI号溝

III 遺跡土層

万吉西浦遺跡の土層は、遺跡の概要で述べたごとく、耕作土—砂質黒褐色土—砂質黃白色土（ローム混在）—礫となっている。砂質黃白色土は、縄文式土器を含まず、縄文時代の基盤層となって

いる。この基盤層にも礫の含まれるものと、そうでないものが存在することは先に述べたとおりである。Fig.23に示した、2 A - 7 区土層は、上から 5 層目の礫層 (VII-1 層) に黒褐色土が含まれ、荒川の礫堆積中、一時陸地化したことを示す。黒褐色土についてみると、II 層は古墳時代～平安時代の遺物含有層であり、III 層は縄文時代中期の遺物含有層である。ちなみに、VII-1 層は無遺物層である。



第23図 遺跡土層図

- I . 耕作土。
- II . 黒褐色土。
- III . 小石を少し含む黒褐色土。
- IV . 小石を多く含む黒褐色土 (IIIよりは薄い)
- V₁ . 小石と大きめの砂を含む。
- VII₁ . 小砂利の層 (いくつか小石も含む)
- V₁ . V₁と同類ただ砂ない V₁より細く小石が少ない。
- VII . 砂層 (いくつか大きめの石を含む。砂の大きさは V 同じ)
- VIII₁ . 小砂利と砂と小量の土を含む。またかなりの数の根毛を含む。
- VI₂ . 小砂利層 (小石とあらめの砂を含む)
- VIII₂ . VIIと同類 (ここまで根毛がみられる)
- VI₃ . 小砂利層 (砂をほとんど含まない)
- VIII₃ . VII₁と同類 (しかし水分はあまり含まない)
- VI₃ . VI₁と同類 (砂は VI₂より細かい)
- VI₄ . VI₂と同類。
- VI₅ . VI₃と同類。
- V₃ . V₁と同類、ただ V₁より砂が細かい。
- V₄ . V₁と同類。V₁より砂が大きめ (つまり、ごく小さな礫)
- V₅ . V₂と同類。小石と細かめの砂を多量に含む。



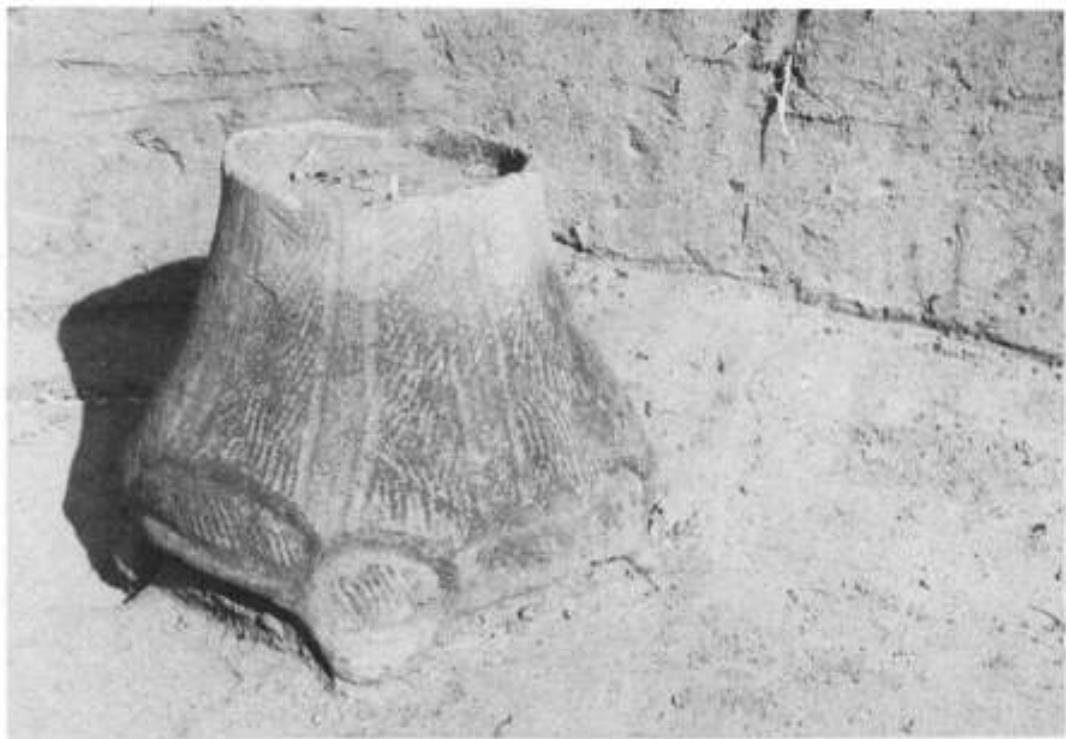
1. 航 空 写 真



2. 1次発掘調査区



3. 2次発掘調査区



4.. A - 3 埋甕及び 2 A - 7 出土縄文式土器



5. D-4 集石遺構(炉)



6. D-4 集石遺構 集石除去後



7. C - 5 土 坡



8. E - 4 集石土坡



9. E - 6 集石土堆



10. E - 6 集石土堆 砾除去後



11. E - 6 集石土塙骨片出土狀況



12. E - 6 集石土塙砾第 2 面



13. F - 10 土 塚



14. I - 9 土 塚



15.
I 号 溝



16.
I 号 溝 拓 大



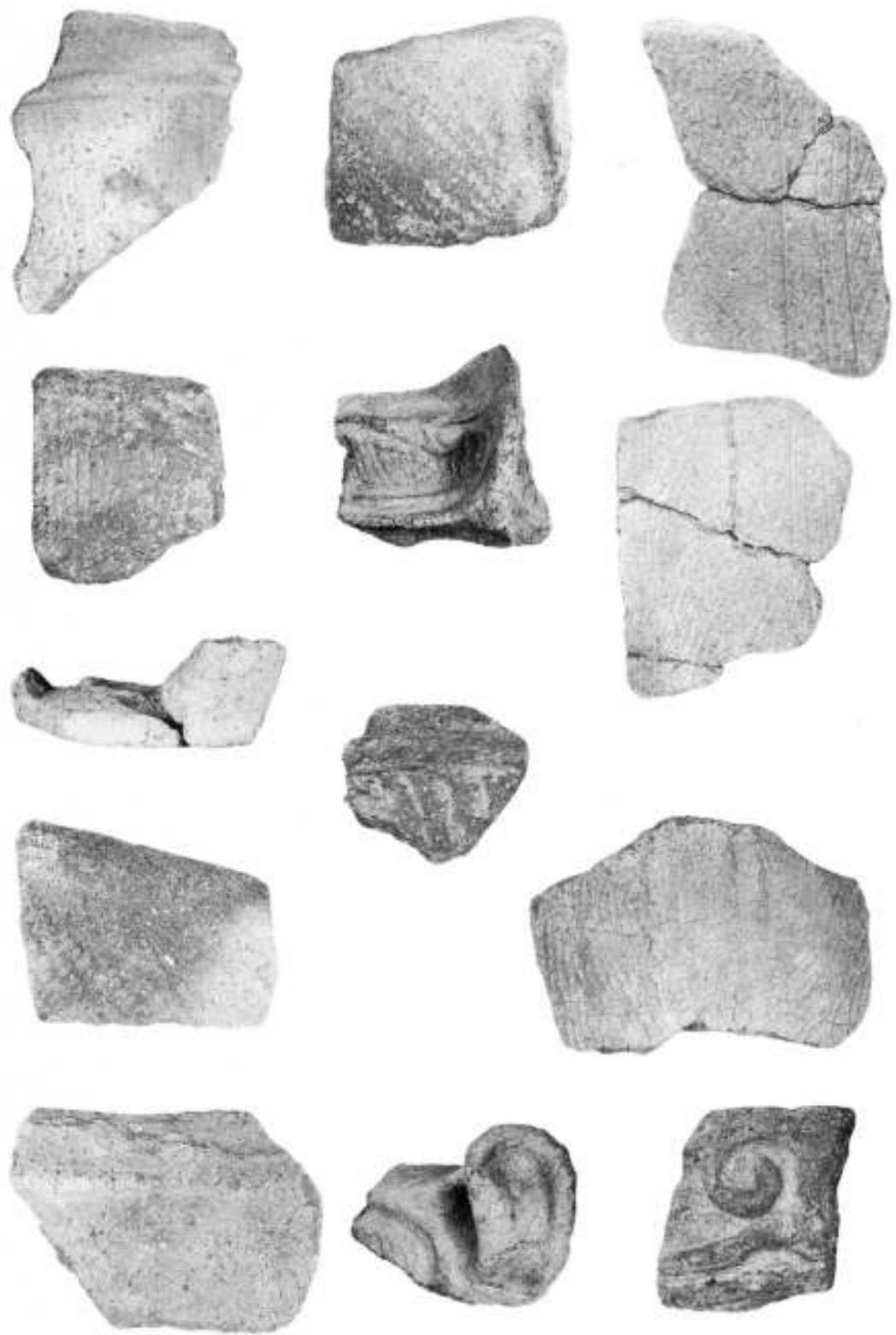
17. II 号 溝



18. III 号 溝



19. III 号 溝



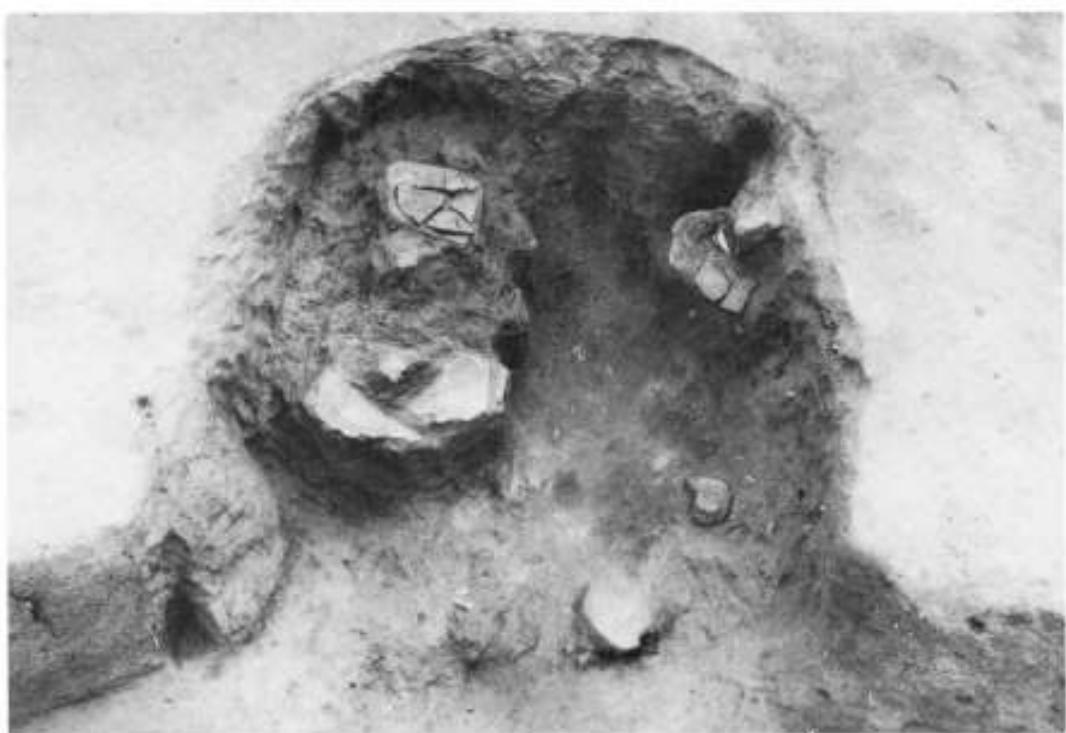
20. 出土縄文式土器



21. 出 土 石 器



22. K - 3 住居址



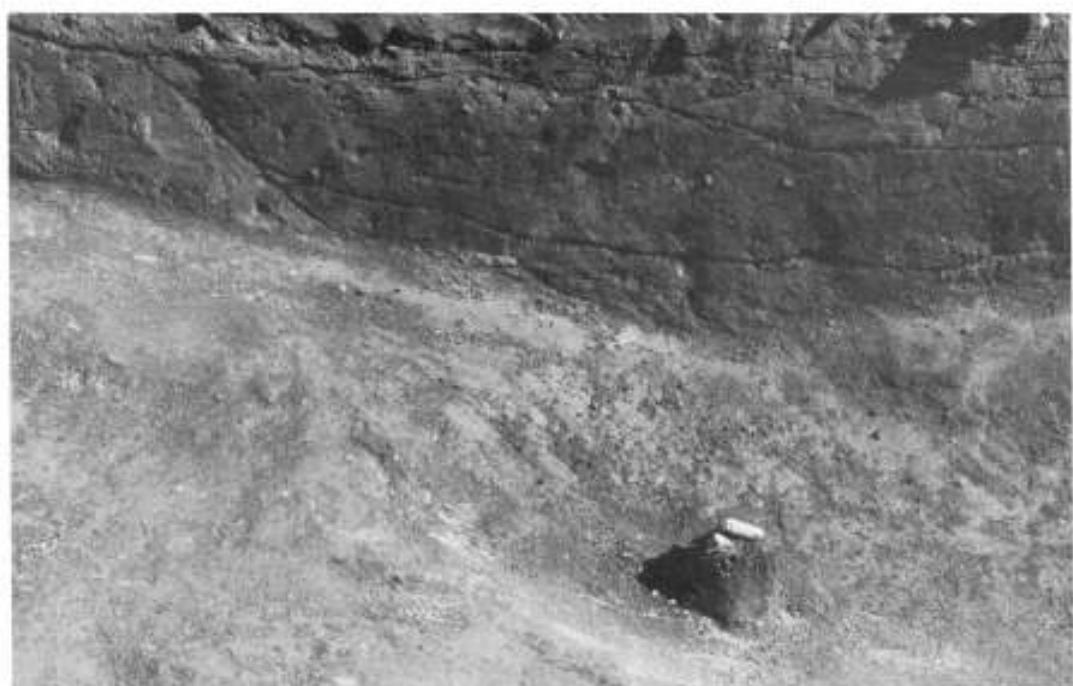
23. K - 3 住居址 カマド



24. K-3 住居址 鉄器出土状況 (1)



25. K-3 住居址 鉄器出土状況 (2)



26.

2 A - 5 溝状遺構



27.

2 A - 5 溝状遺構



28.

VI・V号溝及
D-5土塁



29.

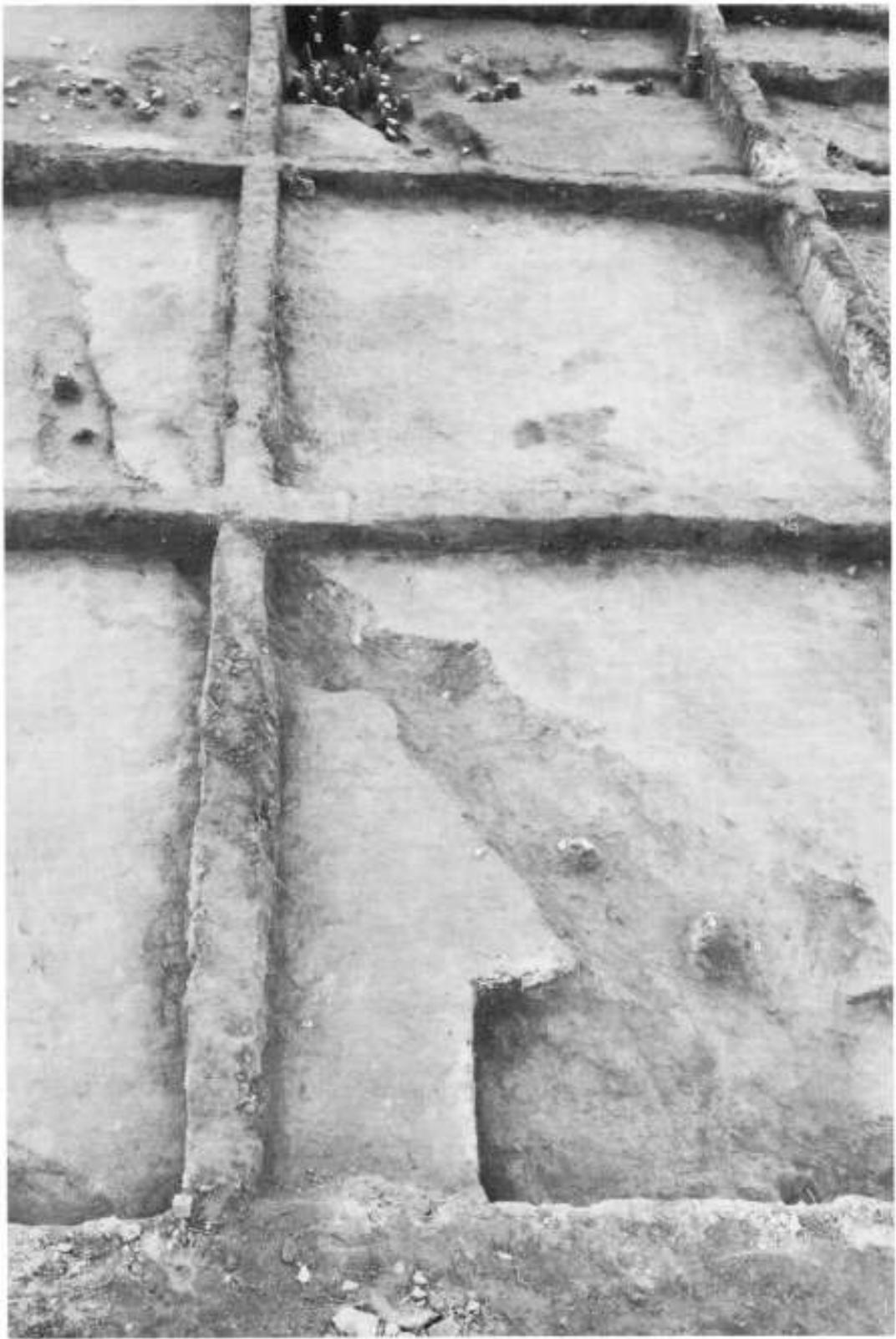
VI・V号溝交点附近



30.
VI・V号溝交点
遺物出土状況



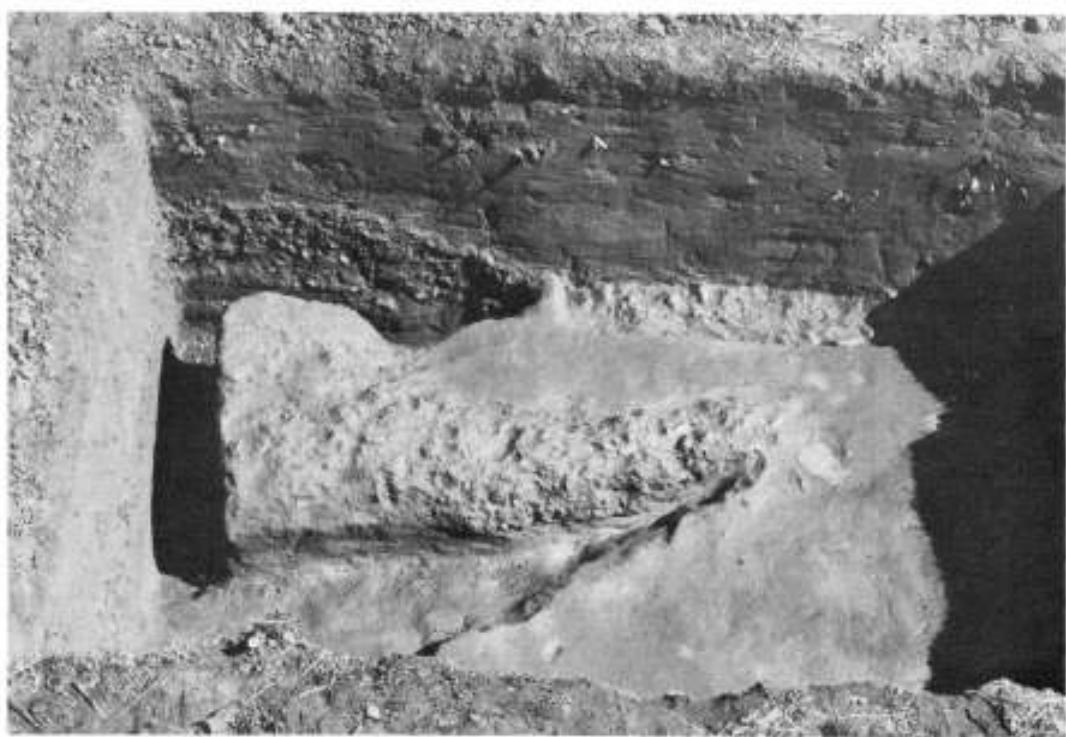
31.
P-5 土 坑
遺物出土状況



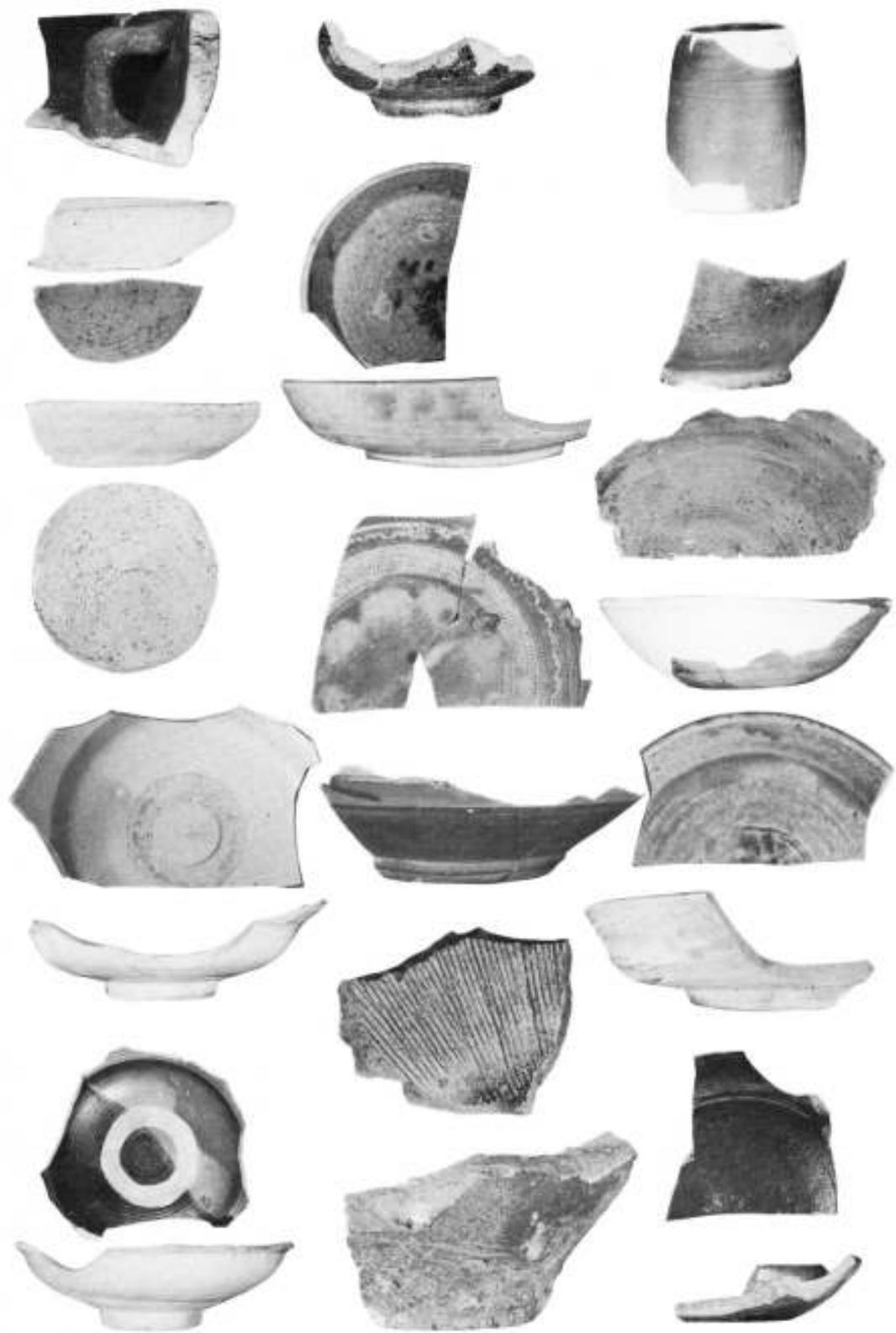
32. VI 号 溝



33. E-7 集石遺構



34. 2B-1 集石



35. 近世遺構出土遺物